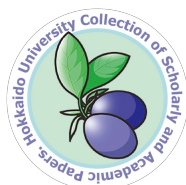




Title	第2章 サーミ高校における教育の現状
Author(s)	上山, 浩次郎; 佐々木, 千夏; 小野寺, 理佳
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 32, 61-122
Issue Date	2015-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58476
Type	departmental bulletin paper
File Information	AN00075302_32_61-122.pdf



第2章 サーミ高校における教育の現状

上山浩次郎 | 愛媛大学四国地区国立大学連合アドミッションセンター研究員
佐々木千夏 | 旭川大学短期大学部助教
小野寺理佳 | 名寄市立大学保健福祉学部教授

はじめに

品川（2013）では、ノルウェーの教育制度とサーミの人々への教育の歴史的変遷を確認した上で、カラショークにあるサーミ高校の概要を、元校長へのインタビューにもとづきながら明らかにしている。

では、このサーミ高校に通う高校生は、実際、どのような生活を送りどのような意識をもっているのだろうか。また、そこで働く教員は、どのような意識にもとづきながらどのような教育実践をしているのだろうか。本章では、こうしたサーミ高校の高校生と教員の生活と意識を明らかにする。そのことを通して、サーミ高校が彼らにとってどのような意味をもっているのかという点に考察を加えることで、サーミ高校における教育の現状を明らかにしたい。

本章の構成は以下の通りである。まず、第1節では、サーミ高校に通う高校生を対象に、サーミ高校への評価やサーミ語・サーミ文化との関わりなどに注目しながら、彼らの生活と意識を明らかにする。次の第2節では、サーミ高校で働く教員の教育実践に注目しながら彼らの生活と意識を明らかにする。それらを踏まえて、最後に、サーミ高校がどのような意味をもっているのか考察し、サーミ高校における教育の現状を明らかにする。

なお、補節としてサーミ高校の保護者の生活と意識についても考察を加えた。適宜参照されたい。

第1節 サーミ高校に通う高校生の生活と意識

本節では、サーミ高校に通う高校生の生活と意識を明らかにする。その際、まず、彼らがサーミ高校での学校生活をどのように評価しているのか、また彼らがサーミ高校を卒業後にどのような将来展望をもっているのかを明らかにする（第1項）。次に、彼らのサーミ語やサーミ文化との関わりや、彼らのサーミとしてのアイデンティティに検討を加える（第2項）。それらをうけて、さらに第1項で検討した学校生活・将来展望と、第2項で検討したサーミ語・サーミ文化・アイデンティティとの関連についても吟味する（第3項）。

本節で用いるデータは、2013年12月、カラショークにあるサーミ高校に通う高校生を対象にして行ったアンケート調査票から得られたものである。調査票は、サーミ高校の教員を通してサーミ高校に通う高校生へ配布していただき、その後サーミ高校で取りまとめをしてもらった後に、郵送していただいた。アンケート調査票は150名分配布し71名分（回収率47.3%）の回答を得た。

第1項 学校生活・将来展望

（1）基礎データ

本報告の対象はサーミ高校に在籍する1年生26名（36.6%）、2年生18名（25.4%）、3年生14

名（19.7%）、学年不明が13名（18.3%）の計71名である（表2-1-1）。そのうち、73.2%にあたる52名が進学コースに在籍している（表2-1-2）。本校にはそのほかに、技術系コース、保健系コース、建築コースという3つの専門コースがあるが、今回の対象者では2割程度と少ない。したがって、進学希望者が多く、同時に1年生も全体の3分の1を占めていることから、現時点では高卒後のことを具体的に考える段階ではない者が多いのではないかと予想される。

年齢を見ると（表2-1-3）、16歳、17歳、18歳が全体の80%以上を占めており、これは日本の高校と同様に中学校卒業後、ストレートに進学してきた者が多いことを物語っている¹⁾。念のため、それらの年齢以外の者の学年を確認すると、15歳の1名は1年生、19歳以上は2年生に20歳が2名と28歳が1名、3年生に28歳1名であった²⁾。全体の男女比は、男性36名（50.7%）、女性35名（49.3%）とほぼ均等である（表2-1-4）。高校に進学する前に関しては、1名を除く70名（98.6%）がサーミ高校と同様、「フィンマルク県」に所在を置く中学校の出身である（表2-1-5）。

在籍コースの偏りや無回答者の多さは否めないが、必要に応じて性別の違いにも目配りしつつ、高校生の学校生活から概観していこう。

表2-1-1 学年

	度 数	構成比
1年生	26	36.6%
2年生	18	25.4%
3年生	14	19.7%
無回答	13	18.3%
合計	71	100.0%

表2-1-2 在籍コース

	度 数	構成比
進学コース	52	73.2%
技術系コース	8	11.3%
保健系コース	6	8.5%
建築コース	3	4.2%
無回答	2	2.8%
合計	71	100.0%

表2-1-3 年齢

	度 数	構成比
15歳	1	1.4%
16歳	29	40.8%
17歳	16	22.5%
18歳	17	23.9%
19歳以上	6	8.4%
無回答	2	2.8%
合計	71	100.0%

表2-1-4 性別

	度 数	構成比
男性	36	50.7%
女性	35	49.3%
合計	71	100.0%

表2-1-5 出身中学の所在地

	度 数	構成比
フィンマルク県	70	98.6%
トロムス県	0	0.0%
ヌールラン県	0	0.0%
その他	1	1.4%
合計	71	100.0%

注)「その他」の1名はオスロとのこと。

（2）学校生活

まず、そもそもなぜサーミ高校に進学してきたのか、その理由を尋ねた結果が表2-1-6である。最も多いのが「家の近くに（高校が）あるから」（81.7%）という理由であり、サーミ高校で学びたいという強い希望を持っている者が多いとはいいいがたい。生徒のほぼ全員が中学校時代をフィ

ンマルク県で過ごしてきたので、それに引き続き、地元での進学志向が強かったことがわかる。次いで、「自分がサーミだから」(39.4%)という民族意識に触れる理由が約4割を占める。ただし、サーミとしての意識にかかわる他の理由——「サーミ語の力を高めたい」(12.7%)、「サーミ文化を学びたい」(5.6%)、「サーミ同士の交流を深めたい」(2.8%)——などはさほど振るわない。次の第2項で述べるように、多くの生徒たちがすでに小学校入学以前からサーミ語に触れ、サーミ文化にもなじみのある生活を送ってきている。このため、それらが入学理由にはなりにくいと考えられる。こうしたことから、サーミとしてのアイデンティティを確認したり、民族意識を高めたりといった意識の下で進学を決めたというより、身近にある高校に進学をしてきたという傾向が強いように思われる。加えて、「(高卒後の) 進学に有利だから」(29.6%)、「資格が得られるから」(22.5%)、「就職に有利だから」(16.9%)がそれぞれ2割程度いることから、高校卒業後の進学や就職を視野に入れていることはうかがえる。この点は、対象者の7割が進学コース在籍者であることとも矛盾していない。

そして、進学を決める際には「自分で選んだ」(73.2%)という割合が最も多くなっており、「親」の勧め(21.1%)が次に続く(表2-1-7)。直前の表2-1-6では、「家族や親族も通っていたから」(22.5%)という理由もうかがえるため、進学の決定に家族や親せきの影響がないわけではない。しかし全体的な傾向としては、自分自身で、自宅から通いやすいこの高校を選んだというパターンが優勢といえるだろう。

表2-1-6 サーミ高校への進学理由(複数回答)

	度 数	構成比
家の近くにあるから	58	81.7%
自分がサーミだから	28	39.4%
進学に有利だから	21	29.6%
資格が得られるから	16	22.5%
家族や親族も通っていたから	16	22.5%
就職に有利だから	12	16.9%
専門的な知識や技術が得られるから	11	15.5%
サーミ語の力を高めたいから	9	12.7%
実践的な教育が充実しているから	6	8.5%
サーミ文化を学びたいから	4	5.6%
サーミ同士の交流を深めたいから	2	2.8%
家業を継ぐため	1	1.4%
自分の学力に合っているから	0	0.0%
その他	2	2.8%
回答者計	71	100.0%

表2-1-7 サーミ高校への進学の勧め(複数回答)

	度 数	構成比
自分で選んだ	52	73.2%
親	15	21.1%
小・中学校の先生	9	12.7%
きょうだい	6	8.5%
親戚	4	5.6%
先輩	3	4.2%
友人	2	2.8%
近所の人	1	1.4%
その他	4	5.6%
回答者計	71	100.0%

次に、現在の学校生活に目を向けてみる。サーミ高校への評価に関して、4点尺度で尋ねた結果が以下の表2-1-8である。各項目に対して、肯定的な評価（「そう思う」および「ややそう思う」の計）が高い値を占めているのが、「サーミ語を身につけられる」（95.5%）、「サーミの友人ができる」（92.6%）、「サーミ文化を身につけられる」（90.8%）である。中でも、サーミ語を身につけられることは80.3%が率直に肯定しており、高校教育におけるサーミ語の学習は順調になされているようである。サーミの友人の獲得や、サーミ文化の習得は先の進学理由（表2-1-6）ではあまり強うかがえなかったことから、在学して改めて友人や文化の習得を実感している。先にも触れたように、かなり早い段階からサーミ語やサーミ文化になじみのある生活を送ってきている。そのため時系列的には、幼少期からの生活に引き続き、高校でもサーミの言語や文化、友人に囲まれた生活を送れていることを実感していると考えたほうがよいだろう。

「サーミ語の授業を増やすべき」、「サーミ文化の授業を増やすべき」といったさらなる要求に関しては、否定的な評価（「そう思わない」および「あまりそう思わない」の計）がそれぞれ75.0%、71.6%と高い。幼少期からサーミの言語と文化になじみがあることをふまえれば、これ以上は求めないこともうなずける。ほかの要求に目を向けると、「もっと公的財政支援を増やすべき」と考える割合は高い（79.7%）。ノルウェーの学校では義務教育段階から国立大学まで基本的に授業料はかからない（品川 2013:53）ということだが、生徒たちは在学中にかかる諸費用に関してはさらなる支援を求めているということになるだろう。

サーミの文化や言語の学習、サーミの友人数の増加が高校生活の中で肯定的に捉えられている一方で、彼らはノルウェーの文化や生活様式を失っているわけでもない。「サーミ以外との友人との関わりが少なくなる」とは思っていない割合が72.8%、「ノルウェー語が覚えられない」わけではないという割合が95.6%、「ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない」とは思わない割合が91.0%である。こうしたことから、日常の大半を過ごす高校の中で、言語や文化を通してサーミであることを感じ、同じエスニシティを持つ友人たちとのかかわりが密になったとしても、ノルウェーの文化や言語、サーミ以外の友人とのかかわりは保持されており、これまでの社会関係にまで影響が及んでいるわけではないことがわかる。

表2-1-8 サーミ高校への評価

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合 計
専門的な知識が得られる	23	28	10	3	64
	35.9%	43.8%	15.6%	4.7%	100.0%
サーミ語を身につけられる	53	10	2	1	66
	80.3%	15.2%	3.0%	1.5%	100.0%
サーミ語で学ぶので理解しやすい	12	25	15	14	66
	18.2%	37.9%	22.7%	21.2%	100.0%
サーミ文化を身につけられる	33	26	5	1	65
	50.8%	40.0%	7.7%	1.5%	100.0%
サーミの友人ができる	43	19	5	0	67
	64.2%	28.4%	7.5%	0.0%	100.0%
サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	5	13	17	31	66
	7.6%	19.7%	25.8%	47.0%	100.0%
ノルウェー語が覚えられない	1	2	7	58	68
	1.5%	2.9%	10.3%	85.3%	100.0%
ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない	1	5	11	50	67
	1.5%	7.5%	16.4%	74.6%	100.0%

教育設備が整っている	18	29	15	4	66
	27.3%	43.9%	22.7%	6.1%	100.0%
サーミ語の教材が整っている	12	36	15	5	68
	17.6%	52.9%	22.1%	7.4%	100.0%
進学に有利である	15	33	14	3	65
	23.1%	50.8%	21.5%	4.6%	100.0%
就職に有利である	17	37	9	2	65
	26.2%	56.9%	13.8%	3.1%	100.0%
もっと公的財政支援を増やすべき	28	23	7	6	64
	43.8%	35.9%	10.9%	9.4%	100.0%
サーミ語の授業を増やすべき	3	14	25	26	68
	4.4%	20.6%	36.8%	38.2%	100.0%
サーミ文化の授業を増やすべき	5	14	21	27	67
	7.5%	20.9%	31.3%	40.3%	100.0%

以上に見たように、サーミ語の学習状況にはおおむね肯定的な評価が高いというのが全体の傾向としてある。さらに具体的に、サーミ語の学習についての意見を聞いたのが表2-1-9である。

サーミ語の学習がサーミ集住地域以外での進学、就職、生活に不利になるかどうかを尋ねた項目では、就職と生活、つまり、学生を終えて社会に出てからの段階で「不利ではない」と考える割合がともに7割程度を占め、懸念には及ばないようである。しかしながら、進学に関しては不利だと考える割合が44.7%、不利ではないと考える割合が55.2%と二極化している。ここから、高校でサーミ語を中心に学習することが、大学進学の際に不利になるかもしれないと危惧している者が半数近くいることがわかる。そしてその結果、「理系科目の学習はサーミ語よりもノルウェー語の方がよい」と考える割合が75.4%存在しているものと思われる。別の可能性として、理系科目についてはノルウェー語のほうが効率よく学べると考えられているのかもしれない。実際、サーミ高校の理系科目担当が生徒と接するとき使用する言語は、ノルウェー語がメインで少しのサーミ語だということである³⁾。いずれにしても、大半の学生が理系科目の学習は現状通りノルウェー語中心のままでよいと考えていることがわかる。

表2-1-9 サーミ語の学習について

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合 計
理系科目の学習はサーミ語よりもノルウェー語の方がよい	32	20	12	5	69
	46.4%	29.0%	17.4%	7.2%	100.0%
サーミエリア以外の地域へと進学する際には不利になる	8	22	23	14	67
	11.9%	32.8%	34.3%	20.9%	100.0%
サーミエリア以外の地域で就職する際には不利になる	6	13	28	21	68
	8.8%	19.1%	41.2%	30.9%	100.0%
サーミエリア以外の地域で生活する際には不利になる	6	14	22	26	68
	8.8%	20.6%	32.4%	38.2%	100.0%

学校生活の様子について、最後に生活満足度に注目しよう。表2-1-10にあるように、8項目について4点尺度で満足度を尋ねた。全体の傾向として、どの項目にも率直に「不満」と回答した者はきわめて少ない。とくに、「授業の内容」、「教員との交流」、「学生同士の交流」は「やや不満」まで含めても不満に感じている者は少なく、どれも数パーセントにとどまる。学生生活の主たるものである授業や人間関係において満足度が高いということは、現状の高校生活のあり方が多くの生

徒に受け入れられ、ストレスを感じている者はさほど多くないということになる。

「専門的な知識や技術の獲得」には 79.7% が満足を示しており、「サーミ文化への理解の高まり」も 73.5% が満足している。そして、実際の「サーミ語の力の向上」も 88.4% が満足している状態である。こうした比較的高い満足度から、サーミ高校での現在の生活に不満を抱いている者はあまりいないといってよいだろう。

表 2 - 1 - 10 サーミ高校での生活満足度

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	合 計
授業の内容	21	44	5	0	70
	30.0%	62.9%	7.1%	0.0%	100.0%
専門的な知識や技術の獲得	21	34	14	0	69
	30.4%	49.3%	20.3%	0.0%	100.0%
サーミ文化への理解の深まり	16	34	18	0	68
	23.5%	50.0%	26.5%	0.0%	100.0%
サーミ語の力の向上	30	31	8	0	69
	43.5%	44.9%	11.6%	0.0%	100.0%
教育施設・設備	24	30	15	2	71
	33.8%	42.3%	21.1%	2.8%	100.0%
サーミ語の教材	19	25	20	0	64
	29.7%	39.1%	31.3%	0.0%	100.0%
教員との交流	30	34	5	1	70
	42.9%	48.6%	7.1%	1.4%	100.0%
学生同士の交流	49	20	1	0	70
	70.0%	28.6%	1.4%	0.0%	100.0%

(3) 将来展望

では、高校卒業後の生活について生徒たちはどのような展望を持っているのだろうか。

はじめに、卒業後の進路希望については「進学」が優勢であり、48 名（67.6%）が該当する（表 2 - 1 - 11 - 1）。この 48 名中 40 名が現在、進学コースに在籍している。また、「就職」を希望している 7 名のうち 2 名は進学コースだが、4 名は保健系コース、1 名は建築コース在籍者である。進路が「未定」だという 7 名は 4 名が進学コース、3 名が技術系コースに在籍しており、7 名中 4 名がまだ 1 年生である。性別の違いを考慮すると、男性が 61.1%、女性が 74.3% となっており、女性ほど進学を希望する者が多いといえるかもしれない。ただし、性別と進学を希望するかしないかのクロス表をみると、 $p=0.312$ と有意な違いがあるとはいえない（表 2 - 1 - 11 - 2）⁴⁾。

表 2 - 1 - 11 - 1 サーミ高校卒業後の進路希望

	度 数			構成比		
	男 性	女 性	合 計	男 性	女 性	合 計
進学	22	26	48	61.1%	74.3%	67.6%
就職	3	4	7	8.3%	11.4%	9.9%
未定	4	3	7	11.1%	8.6%	9.9%
その他	2	0	2	5.6%	0.0%	2.8%
無回答	5	2	7	13.9%	5.7%	9.9%
合計	36	35	71	100.0%	100.0%	100.0%

表2-1-11-2 性別×進学を希望するか

	進 学			構 成 比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
男性	14	22	36	38.9%	61.1%	100.0%
女性	9	26	35	25.7%	74.3%	100.0%
合計	23	48	71	32.4%	67.6%	100.0%

p=0.312

進学を希望している48名に対してその理由と具体的な大学名について尋ねたのが表2-1-12-1、表2-1-12-2である。まず、全体の85.4%が「よい職業に就きたいから」という理由で大学進学を考えている。次いで、「もっと勉強したい」と考える割合が41.7%存在する。まだ「就職したくないから」進学するという者は皆無であることから、日本のように就職を先延ばしにしたいと考えるモラトリアムな若者はサーミ高校には存在しないということがわかる。OECDによれば2012年のノルウェーの大学進学率は76.7%ということであり、同年の日本の進学率(51.6%)を上回っている⁵⁾。

表2-1-12-1 進学したい理由(複数回答)

	度 数	構 成 比
よい職業に就きたいから	41	85.4%
もっと勉強したいから	20	41.7%
就職したくないから	0	0.0%
その他	4	8.3%
回答者計	48	100.0%

表2-1-12-2 進学したい大学(複数回答)

	度 数			構 成 比		
	男 性	女 性	合 計	男 性	女 性	合 計
トロムソ大学	13	13	26	59.1%	50.0%	54.2%
オスロ大学	1	5	6	4.5%	19.2%	12.5%
アルタのユニバーシティ・カレッジ	1	4	5	4.5%	15.4%	10.4%
サーミ・ユニバーシティカレッジ	0	0	0	0.0%	0.0%	0.0%
その他	14	8	22	63.6%	30.8%	45.8%
回答者計	22	26	48	100.0%	100.0%	100.0%

表2-1-12-2に目を転じると、進学したい大学は「トロムソ大学」(54.2%)が最も多い。この点は、品川(2013)において示されるように、サーミ高校の教員いわく、生徒たちにとってトロムソが地域的に一番手近な進学先だということである(品川2013:59)。「オスロ大学」(12.5%)や「アルタのユニバーシティ・カレッジ」(10.4%)を考えている者は1割程度と多くはない。注目すべきは、「サーミ・ユニバーシティ・カレッジ」への進学を考えている者は1人もいないという点であろう。「サーミ・ユニバーシティ・カレッジ」は社会科学、サーミ言語、自然科学の3つの学士課程があり、とくにサーミ語(言語学)に力を入れている。「サーミ工芸品」という授業科目があり、どの学部でも様々な形でサーミの伝統との関連が強いということだが、サーミ高校に在籍する生徒は大学進学後には、サーミとしての文化や言語を中心とした教育を志してはいないということがわかる⁶⁾。さらに、進学先の大学に関しては男女でやや違いが見られるようにみえる。

女性で「オスロ大学」や「アルタのユニバーシティ・カレッジ」を挙げた者がそれぞれ19.2%、15.4%と多く見られるからである。ただし、クロス表分析をしてみると、有意な違いがあるとはいいがたい（表2-1-12-3）。

進学希望者48名に対して、大学等で勉強したい内容を自由記述で尋ねたところ、多様な回答が出そろった（表2-1-12-4）。最も多いのは、技術者やエンジニア養成のための科目を含む「工学」（15名）である。全体の中では、「医学」（6名）、「看護学」（3名）、「歯学」（3名）、「保健」（2名）などの医療関係科目が目立つ。こうしたことから、卒業後は技術職や医療職などの専門職を目指す生徒が多くいると予想される。

表2-1-12-3 性別×進学したい大学

	トロムソ大学				
	度 数		合計	構成比	
	×	○		×	○
男性	9	13	22	40.9%	59.1%
女性	13	13	26	50.0%	50.0%
合計	22	26	48	45.8%	54.2%
p=0.573					
	オスロ大学				
	度 数		合計	構成比	
	×	○		×	○
男性	21	1	22	95.5%	4.5%
女性	21	5	26	80.8%	19.2%
合計	42	6	48	87.5%	12.5%
p=0.199					
	アルタのユニバーシティ・カレッジ				
	度 数		合計	構成比	
	×	○		×	○
男性	21	1	22	95.5%	4.5%
女性	22	4	26	84.6%	15.4%
合計	43	5	48	89.6%	10.4%
p=0.204					

表2-1-12-4 進学して勉強したい内容（複数回答）

内 容	度 数	内 容	度 数
工学	15	保健（救急救命）	2
医学	6	経済学	1
法律学	4	教職科目	1
理学	4	セキュリティ	1
看護学	3	環境	1
歯学	3	芸術（ドラマ）	1
心理学	3	子どもや若者	1
航空（工）学	2	未定	11
福祉（ソーシャルワーカー）	2	無回答	9
警察（学校）	2	回答者計	48

注）1.「工学」には土木工学、石油化学、技術者・エンジニア養成科目を含む。

2.「理学」には物理学、化学、数学を含む。

なお、卒業後に「就職」を希望している7名の就職理由に関しては、3名が「早く働きたいから」ということであり、その他、「進学できないから」を選んだ者が1名、すでに「見習い」として仕事をしていると思われる者が1名、不明が2名であった。

では、学生を終えた後に就きたい仕事に関してはどうか。この設問では、無回答を除くと

以下のように多岐にわたる職が挙げられた（表2-1-13-1）。「会社の管理職」（7名）、「会社の技術職」（7名）、「研究職」（7名）、「公務員」（5名）、「教員」（5名）、医師（5名）といったいわば安定的な職業を挙げる者が多い傾向にある。サーミの伝統的な仕事である「トナカイ飼育」は5名が挙げており、「トナカイ角の加工」、「トナカイ食肉加工」にはそれぞれ1名ずつが該当する。決して多いとはいえないが、71名中1割に当たる7名がトナカイ関係の仕事を視野に入れているということがわかる。この7名のうち、女性は2名と少ないことから、トナカイ関係の仕事は男性のほうが志向しやすいのではないかと考えられる。

そのほかには、「救急救命関係」（3名）、「弁護士」（3名）、「警察」（3名）、「心理学者」（3名）といったように、先の表2-1-12-4で見た進学先で学びたい勉強内容と関連づけられた職が挙げられているといえる。進学コースの在籍者が多いという特徴があったが、その後の就職に関しては、現時点で様々な職業へのあこがれを持つ高校生が大半と考えてよいだろう。

すべての項目に関して、男性より女性該当者が多いのは、「会社の管理職」、「教員」、「医師」、「看護師」、「救急救命関係」、「弁護士、法律家」、「警察、衛生兵」、「歯科医師」、「心理学者」である。並べてみると、医療系の専門職を中心とした職業的地位の高いものが多いように思われる。反対に、「会社の技術職」や「技術者」は計9名すべてが男性のみの該当であるので、職業志向における若干の偏りが見出せるように見える。ただ、各職業希望別にクロス表分析してみると、有意な違いがあるのは、「会社の技術職」のみであり、性別で違いが見られると強くはいえない。

就職を希望する地域は現在の生活拠点である「フィンマルク県」が53.5%と約半数が挙げている（表2-1-13-2）。本節の冒頭で確認したように、生徒のほぼ全員がフィンマルク県の中学出身者であり、さらに8割を超える者が、引き続き、地元・フィンマルクのサーミ高校に進学してきた。これらをふまえれば、将来には約半数の生徒が地元・フィンマルクを離れる展望を持っているということになる。なお、表に掲載したように就職の希望地域においては男女による違いはほとんどない。

表2-1-13-1 将来就きたい仕事・職業（複数回答）

	度 数			構 成 比			p 値
	男 性	女 性	合 計	男 性	女 性	合 計	
会社の管理職	3	4	7	8.3%	11.4%	9.9%	0.710
会社の技術職	7	0	7	19.4%	0.0%	9.9%	0.011
研究職	5	2	7	13.9%	5.7%	9.9%	0.429
公務員	4	1	5	11.1%	2.9%	7.0%	0.357
教員	2	3	5	5.6%	8.6%	7.0%	0.674
医師	2	3	5	5.6%	8.6%	7.0%	0.674
トナカイ飼育	4	1	5	11.1%	2.9%	7.0%	0.357
看護師	1	3	4	2.8%	8.6%	5.6%	0.357
保育士	2	2	4	5.6%	5.7%	5.6%	1.000
自営業	2	2	4	5.6%	5.7%	5.6%	1.000
救急救命関係	0	3	3	0.0%	8.6%	4.2%	0.115
弁護士、法律家	1	2	3	2.8%	5.7%	4.2%	0.614
警察、衛生兵	1	2	3	2.8%	5.7%	4.2%	0.614
歯科医師	0	3	3	0.0%	8.6%	4.2%	0.115
会社の事務営業	2	1	3	5.6%	2.9%	4.2%	1.000
農業	2	1	3	5.6%	2.9%	4.2%	1.000
心理学者	1	2	3	2.8%	5.7%	4.2%	0.614
パイロット、機長	1	1	2	2.8%	2.9%	2.8%	1.000
技術者	2	0	2	5.6%	0.0%	2.8%	0.493
店員販売員	1	1	2	2.8%	2.9%	2.8%	1.000

工員	2	0	2	5.6%	0.0%	2.8%	0.493
銀行員	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%	1.000
トナカイ角の加工	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%	1.000
トナカイ食肉加工	0	1	1	0.0%	2.9%	1.4%	0.493
プログラマー	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%	1.000
メカニック	0	1	1	0.0%	2.9%	1.4%	0.493
経済学者	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%	1.000
子どもの保護	0	1	1	0.0%	2.9%	1.4%	0.493
獣医師	0	1	1	0.0%	2.9%	1.4%	0.493
石油関係	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%	1.000
わからない	3	1	4	8.3%	2.9%	5.6%	0.614
無回答	7	12	19	19.4%	34.3%	26.8%	0.188
回答者計	36	35	71	100.0%	100.0%	100.0%	

注) 1. 集計の結果、「その他」の該当者が31名と多かったためそれらもすべて具体的に掲載した。
2. p値は、性別×各職業を希望するかないかの2×2のクロス表から得られるフィッシャーの正確確率検定から得られる値。

表2-1-13-2 就職を希望する地域（複数回答）

	度 数			構成比		
	男 性	女 性	合 計	男 性	女 性	合 計
フィンマルク県	20	18	38	55.6%	51.4%	53.5%
トロムス県	10	10	20	27.8%	28.6%	28.2%
ヌールラン県	0	1	1	0.0%	2.9%	1.4%
オスロ	7	7	14	19.4%	20.0%	19.7%
その他	7	4	11	19.4%	11.4%	15.5%
回答者計	36	35	71	100.0%	100.0%	100.0%

全体の半数が地元を離れたいという傾向は、仕事に限定せず、将来どこで暮らしたいかを尋ねた質問からもうかがうことができる。表2-1-14-1を見ると、将来、「出身地」で暮らしたいと考える者は23.9%と多くはない。対象の生徒たちはフィンマルク県出身者が多数派であると考えられるが、とくに生まれ育った地に残ることを希望する割合は低いといえる。ただし、フィンマルク県内の「カラショーク」は40.8%が希望し、「カウトケイノ」や、フィンマルク県以外のサーミ集住地域への居住を希望する者まで含めるとさらに7%増える。ここから、サーミ集住地域であれば、「カラショーク」への居住志向が強いことがわかり、その割合は4割程度である。しかし加えて、県外の「オスロ」(23.9%)、「トロムソ」(32.4%)を挙げる者も目立つ。ノルウェーの最北地となるフィンマルク県よりも、その南西に位置し、ノルウェー北部の中心地となっているトロムソ、さらにはノルウェーの首都であるオスロのほうに南下し移り住むことを構想する生徒も決して少なくない。男女差に関しては「出身地」と回答する女性の割合は14.3%と少なく、「トロムソ」と回答する女性の割合は37.1%と多い。そこで、クロス表分析をしてみると、「トロムソ」では有意な違いが見られないものの、「出身地」では10%水準で有意であり、その意味で、女性ほど「出身地」での生活を希望していない（表2-1-14-2）。

将来住みたい地域を選んだ理由にまで目を向けると、比較的明確な記述がそろっている（表2-1-14-3）。該当者の多い「カラショーク」では、カラショークが好きであること、家族が住んでいることが理由になっているケースが多い。オスロやトロムソといったより大きな都市への移住を志向する場合は、やはり大都市であること、それによって仕事も多くあると想定されることが理由になりやすい。消極的な理由として、「将来カラショークにはいたくない」、「これまでずっと実家にいるのでカラショークには少し飽きている」という回答も目に付く。回答者は30名と半数に

まで満たないが、将来の希望を語ることでできる生徒は比較的多いと考えることが出来るのではないだろうか。

表 2-1-14-1 将来どこで暮らしたいか（複数回答）

	度 数			構成比		
	男 性	女 性	合 計	男 性	女 性	合 計
出身地	12	5	17	33.3%	14.3%	23.9%
カラシヨーク	15	14	29	41.7%	40.0%	40.8%
カウトケイノ	1	0	1	2.8%	0.0%	1.4%
上記以外のサーミ集住地	3	1	4	8.3%	2.9%	5.6%
サーミ集住地以外	2	1	3	5.6%	2.9%	4.2%
オスロ	10	7	17	27.8%	20.0%	23.9%
トロムソ	10	13	23	27.8%	37.1%	32.4%
その他	5	6	11	13.9%	17.1%	15.5%
合計	36	35	71	100.0%	100.0%	100.0%

表 2-1-14-2 性別×将来どこで暮らしたいか

	出身地			構成比		
	×	○	合計	×	○	合計
男性	24	12	36	40.9%	59.1%	100.0%
女性	30	5	35	50.0%	50.0%	100.0%
合計	54	17	71	45.8%	54.2%	100.0%
p=0.094						
	トロムソ			構成比		
	×	○	合計	×	○	合計
男性	26	10	36	72.2%	27.8%	100.0%
女性	22	13	35	62.9%	37.1%	100.0%
合計	48	23	71	67.6%	32.4%	100.0%
p=0.454						

表 2-1-14-3 将来暮らしたい場所を選んだ理由（n=30）

出身地	・両親がいるから ・実家だから ・出身地の土地勘があるので出身地に住みたい ・現在、多くの生活機会がある地域にすんでいるが、もし自宅から通えるよい仕事がないなら移動する（同時にロレンスゴクと記述） ・移動が少ないから（OLも選択）	OL	・住みやすい ・別の土地に行ってみたい ・多くの機会がある大都市だから ・大都市が好きだから（TMも選択） ・大きな都市だから（TMも選択） ・将来カラシヨークにはいたくない（TMも選択）
KK	・知人が多くいるから（同時に KS、その他のサーミ地域も選択、ラクセルブと記述）	TM	・たくさんのチャンスがあるから ・トロムソはいい仕事を見つけることのできる場所だと思う（KSも選択） ・カラシヨークには少し飽きてきている。これまでずっと実家にいるので
KS	・好きな場所だから ・ここが好きだから ・ここに家族がいるから ・家族（配偶者と子ども）がいるから ・カラシヨークはとても良い場所だから（出身地） ・私は家族の近くで生活したい（出身地） ・基本的にはカラシヨークとトロムソの両方に住みたい。トロムソは素敵な場所だし、カラシヨークには家族がいるから（同時に TM 選択） ・よい就職機会がある（同時にその他のサーミ地域、TM 選択、アルタと記述） ・カラシヨークはスノーモービルができるから、オスロは楽しそうだから（OLも選択） ・私は騒音が好きではないので、カラシヨークかトロムソに住みたい（TMも選択）	その他	・アルタ（サーミ地域）：私は都市に住みたい。トロムソよりもアルタがいい ・キルケネス（サーミ地域）：そこが好きだし、フィンマルクで生活したいから ・ニューヨーク：住みたいから ・アメリカ、スウェーデン：エキサイティングな経験をしたから ・イングランド：私はこれまでずっとイングランドに住みたいと思ってきた。15歳の時に3週間の語学留学でイングランドに行った。イングランドが大好きになった ・Tennevollen、ノルヴィック：父方の家族がいるから ・ハーシュタ：石油プラットホームでの見習いになりたいから ・わからない

注) KK：カウトケイノ、KS：カラシヨーク、OL：オスロ、TM：トロムソ。表 2-1-14-1 における「その他のサーミ地域」は「その他」にすべてまとめた。出身地がわかる場合はそちらへ優先して掲載し、末尾に出身地と記した。

第2項 言語・文化・アイデンティティ

(1) サーミ語

はじめに、言語について見てみよう。そもそも、ふだん、主にどの言語を用いているのだろうか。表2-1-15を見よう⁷⁾。それによれば、「サーミ語と少しのノルウェー語」が23.9%、「サーミ語」のみが21.1%となっており、45.0%と半数近くの者が主に普段、日常的にはサーミ語を用いていることがわかる。

ただし、「サーミ語とノルウェー語を半々」の者も22.5%存在している。さらに「ノルウェー語と少しのサーミ語」が8.5%、さらに「ノルウェー語」が23.9%となっており、あわせて32.4%と3割程度の者が主にふだんノルウェー語を用いていることもわかる。

とはいえ、ほとんどの者は、サーミ語を使用することができる。表2-1-16を見よう。そこには、どのサーミ語を使えるのかを整理してある（複数回答計）。それによれば、サーミ語を「使えない」者が8.6%に過ぎず、逆にいえば9割以上の者がサーミ語を使えることがわかる。具体的にどのサーミ語を使えるのかといえば、「北サーミ語」を使える者が全体のうち94.3%と多数を占めている。

さらに、複数回答の回答パターンを整理した表2-1-17を見よう。そこからは、「ルレ・サーミ語」や「南サーミ語」などを使用できる者は、すべて「北サーミ語」を使用できることがわかる。その意味で、サーミ語を話せる者はすべて北サーミ語を話すことができる。

表2-1-15 ふだんの使用言語

	度 数	構成比
サーミ語	15	21.1%
サーミ語と少しのノルウェー	17	23.9%
サーミ語とノルウェー語を半々	16	22.5%
ノルウェー語と少しのサーミ語	6	8.5%
ノルウェー語	17	23.9%
回答計	71	100.0%

表2-1-16 使用できるサーミ語（複数回答計）（除：無回答）

	度 数	構成比
北サーミ語	66	94.3%
ルレ・サーミ語	2	2.9%
南サーミ語	2	2.9%
その他	2	2.9%
使えない	6	8.6%
回答者計	70	100.0%

表2-1-17 使用できるサーミ語（回答のパターン）（除：無回答・判別不能）（N = 68）

北サーミ語	ルレ・サーミ語	南サーミ語	その他	使えない	度 数	構成比
○					58	85.3%
				○	4	5.9%
○	○		○		2	2.9%
○		○			2	2.9%
○			○		2	2.9%

表2-1-18 サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	度 数	構成比	聞くこと	度 数	構成比
流暢に話せる	42	70.0%	たいていのことならわかる	35	58.3%
かなり話せる	7	11.7%	日常生活の話題がわかる	18	30.0%
簡単な内容なら話せる	8	13.3%	基本的なことならわかる	5	8.3%
ほとんど話せない	3	5.0%	ほとんど何もわからない	1	1.7%
合計	60	100.0%	合計	59	100.0%
読むこと	度 数	構成比	書くこと	度 数	構成比
本が読める	43	71.7%	どんな文書でも書ける	39	65.0%
簡単な雑誌が読める	11	18.3%	簡単なメモが書ける	15	25.0%
文字が読める	5	8.3%	文字が書ける	4	6.7%
何も読めない	1	1.7%	何も書けない	1	1.7%
合計	60	100.0%	合計	59	100.0%

また、いうまでもなく、彼らのサーミ語能力はかなり高い。表2-1-18には、サーミ語を使用できる者が自身のサーミ語能力をどのように評価しているのか整理した。そこからは、「話すこと」・「読むこと」・「聞くこと」・「書くこと」、という言語表現の4つの側面すべてにおいて、かなりの程度サーミ語を使うことができることがわかる。たとえば、「話すこと」では、「流暢に話せる」と回答する者が70.0%である一方、「ほとんど話せない」が5.0%にすぎない。ただし、そのうち、「聞くこと」に関しては、やや言語能力が「低い」と自己評価されているといえるかもしれない。なぜなら、最も高い能力を示す「たいていのことならわかる」が58.3%であり、「話すこと」「読むこと」「書くこと」の最も高い能力を示す選択肢への回答よりもやや低くなっているからである。

もちろん、こうした言語能力は、ふだん使用する言語と関連している。表2-1-19に言語能力と使用言語のクロス表を整理した⁸⁾。そこからは、ふだん日常的にサーミ語を使う者ほどサーミ語能力の自己評価が高いことがわかる。たとえば、「読むこと」を見ると、主に「サーミ語」を話す者のうち86.2%が「本が読める」と回答しているのに対し、主に「ノルウェー語」を話す者のうち41.2%しか「本が読める」と回答していないのである。

では、こうしたサーミ語は、いつごろに学習するものなのだろうか。表2-1-20を見よう。それによれば、サーミ語の学習時期を「小学校入学前」と回答している者が75.4%と最も多くなっている。その意味で、小学校以前には既にサーミ語を学習している。

さらに表2-1-21から複数回答の回答パターンを見ると、「小学校入学前」のみに回答する者が31.9%となっており、ここからも小学校以前にサーミ語を学習していることがうかがわれる。ただし、「小学校入学前」「小学校のころ」「中学校のころ」の3つすべてに回答している者が39.1%と最も多く、その意味で、これまでコンスタントにサーミ語を学習してきたこともわかる。

表 2-1-19 普段の使用言語×サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	合 計
サーミ語	29	1	0	0	30
半々	12	2	0	0	14
ノルウェー語	1	4	8	3	16
合計	42	7	8	3	60
サーミ語	96.7%	3.3%	0.0%	0.0%	100.0%
半々	85.7%	14.3%	0.0%	0.0%	100.0%
ノルウェー語	6.3%	25.0%	50.0%	18.8%	100.0%
合計	70.0%	11.7%	13.3%	5.0%	100.0%

p=0.000

聞くこと	たいていのことならわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことならわかる	ほとんど何もわからない	合 計
サーミ語	23	6	0	1	30
半々	8	4	0	0	12
ノルウェー語	4	8	5	0	17
合計	35	18	5	1	59
サーミ語	76.7%	20.0%	0.0%	3.3%	100.0%
半々	57.1%	28.6%	0.0%	0.0%	85.7%
ノルウェー語	25.0%	50.0%	31.3%	0.0%	106.3%
合計	58.3%	30.0%	8.3%	1.7%	98.3%

p=0.001

読むこと	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	合 計
サーミ語	25	2	2	0	29
半々	11	1	2	0	14
ノルウェー語	7	8	1	1	17
合計	43	11	5	1	60

サーミ語	86.2%	6.9%	6.9%	0.0%	100.0%
半々	78.6%	7.1%	14.3%	0.0%	100.0%
ノルウェー語	41.2%	47.1%	5.9%	5.9%	100.0%
合計	71.7%	18.3%	8.3%	1.7%	100.0%

p=0.008

書くこと	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字が書ける	何も書けない	合 計
サーミ語	27	1	1	0	29
半々	9	3	1	0	13
ノルウェー語	3	11	2	1	17
合計	39	15	4	1	59

サーミ語	93.1%	3.4%	3.4%	0.0%	100.0%
半々	64.3%	21.4%	7.1%	0.0%	92.9%
ノルウェー語	17.6%	64.7%	11.8%	5.9%	100.0%
合計	65.0%	25.0%	6.7%	1.7%	98.3%

p=0.000

表 2-1-20 サーミ語の学習時期（複数回答計）（除：無回答）

	度 数	構成比
小学校入学前	52	75.4%
小学校のころ	40	58.0%
中学校の頃	36	52.2%
いつごろかわからない	2	2.9%
学んでいない	3	4.3%
回答者計	69	100.0%

表 2-1-21 サーミ語の学習経験（回答パターン）（除：無回答）（N = 69）

小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	学んでいない	度 数	構成比
○	○	○			27	39.1%
○					22	31.9%
	○				6	8.7%
	○	○			5	7.2%
				○	3	4.3%
		○			2	2.9%
			○		2	2.9%
○	○				1	1.4%
○		○			1	1.4%

では、こうしたサーミ語は誰から学んだのだろうか。表 2-1-22（複数回答計）からは「母親」が 72.7%、「小学校の先生」が 68.2%と多く回答されていることがわかる。また、家族の中で言語を教わる人にはジェンダー差が見られることもわかる。すなわち「父親」(66.7%)と比べれば「母親」(72.7%)が、「祖父」(50.0%)と比べれば「祖母」(65.2%)が回答される傾向がある。その意味で、家族の中ではとくに女性からサーミ語を教わっている。

とはいえ、サーミ語は周囲にいる大人から偏りなく学習してきたともいえる。実際、表 2-1-

23 の複数回答の回答パターンをみると、すべての選択肢に回答している者が 16.7%、「きょうだい」以外の選択肢にすべて回答している者が 10.6%と多く回答されているからである。

表 2-1-22 サーマ語を教わった人
(複数回答計) (除: 無回答・非該当)

	度 数	構成比
父親	44	66.7%
母親	48	72.7%
祖父	33	50.0%
祖母	43	65.2%
親戚	39	59.1%
きょうだい	28	42.4%
小学校の先生	45	68.2%
中学校の先生	41	62.1%
その他	14	21.2%
回答者計	66	100.0%

表 2-1-23 サーマ語を教わった人 (回答パターン) (除: 無回答・非該当・「その他」) (N = 66)

父 親	母 親	祖 父	祖 母	親 戚	きょうだい	小学校 の先生	中学校 の先生	度 数	構成比
○	○	○	○	○	○	○	○	11	16.7%
○	○	○	○	○		○	○	7	10.6%
○	○	○	○	○	○			4	6.1%
	○	○	○	○	○	○	○	4	6.1%
○	○							3	4.5%
○								3	4.5%
	○							3	4.5%
						○	○	3	4.5%
○	○					○	○	2	3.0%
	○		○	○	○	○	○	2	3.0%
						○		2	3.0%
							○	2	3.0%
○	○	○	○		○	○	○	1	1.5%
○	○	○		○	○			1	1.5%
○	○	○		○		○	○	1	1.5%
○	○		○	○	○	○	○	1	1.5%
○	○		○	○		○		1	1.5%
○	○		○	○				1	1.5%
○	○		○					1	1.5%
○	○					○		1	1.5%
○		○	○	○	○	○	○	1	1.5%
○		○	○	○		○		1	1.5%
○		○	○			○	○	1	1.5%
○			○	○	○			1	1.5%
○					○	○	○	1	1.5%
	○	○	○	○		○	○	1	1.5%
	○		○					1	1.5%
	○					○		1	1.5%
			○	○		○	○	1	1.5%
			○			○	○	1	1.5%
			○					1	1.5%

このようなサーミ語の学習経験や教えられた人の相違は、サーミ語の言語能力にも影響を与えて

いる。たとえば、サーミ語の学習経験のうち、「小学校入学前」にサーミ語を学習した者ほどサーミ語の言語能力の自己評価が高くなっている。表2-1-24から「聞くこと」をみると、「小学校入学前」にサーミ語を学習していた者の66.7%が「たいていのことならわかる」と回答しているのに対し、「小学校入学前」にサーミ語を学習していない者は25.0%しか「たいていのことならわかる」と回答していないのである。こうした傾向は、その他の言語の側面にも当てはまる。

表2-1-24 サーミ語の学習経験（「小学校入学前」）×サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	合 計
小学校入学前 ×	4	1	5	1	11
小学校入学前 ○	38	4	3	2	47
合計	42	5	8	3	58
小学校入学前 ×	36.4%	9.1%	45.5%	9.1%	100.0%
小学校入学前 ○	80.9%	8.5%	6.4%	4.3%	100.0%
合計	72.4%	8.6%	13.8%	5.2%	100.0%

p=0.000

読むこと	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	合 計
小学校入学前 ×	6	5	1	0	12
小学校入学前 ○	36	5	4	1	46
合計	42	10	5	1	58
小学校入学前 ×	50.0%	41.7%	8.3%	0.0%	100.0%
小学校入学前 ○	78.3%	10.9%	8.7%	2.2%	100.0%
合計	72.4%	17.2%	8.6%	1.7%	100.0%

p=0.000

聞くこと	たいていのことならわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことならわかる	ほとんど何もわからない	合 計
小学校入学前 ×	3	5	4	0	12
小学校入学前 ○	30	13	1	1	45
合計	33	18	5	1	57
小学校入学前 ×	25.0%	41.7%	33.3%	0.0%	100.0%
小学校入学前 ○	66.7%	28.9%	2.2%	2.2%	100.0%
合計	57.9%	31.6%	8.8%	1.8%	100.0%

p=0.000

書くこと	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字が書ける	何も書けない	合計
小学校入学前 ×	4	6	2	0	12
小学校入学前 ○	34	8	2	1	45
合計	38	14	4	1	57
小学校入学前 ×	33.3%	50.0%	16.7%	0.0%	100.0%
小学校入学前 ○	75.6%	17.8%	4.4%	2.2%	100.0%
合計	66.7%	24.6%	7.0%	1.8%	100.0%

p=0.000

表2-1-25 サーミ語の学習経験（分類パターン）×サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	合 計
小学校入学前のみ	15	3	0	2	20
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	21	1	2	0	24
合計	36	4	2	2	44
小学校入学前のみ	75.0%	15.0%	0.0%	10.0%	100.0%
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	87.5%	4.2%	8.3%	0.0%	100.0%
合計	81.8%	9.1%	4.5%	4.5%	100.0%

p=0.128

読むこと	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	合 計
小学校入学前のみ	14	4	1	1	20
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	20	0	3	0	23
合計	34	4	4	1	43
小学校入学前のみ	70.0%	20.0%	5.0%	5.0%	100.0%
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	87.0%	0.0%	13.0%	0.0%	100.0%
合計	79.1%	9.3%	9.3%	2.3%	100.0%

p=0.075

聞くこと	たいていのことならわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことならわかる	ほとんど何もわからない	合 計
小学校入学前のみ	12	5	1	1	19
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	16	7	0	0	23
合計	28	12	1	1	42
小学校入学前のみ	63.2%	26.3%	5.3%	5.3%	100.0%
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	69.6%	30.4%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	66.7%	28.6%	2.4%	2.4%	100.0%

p=0.467

書くこと	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字が書ける	何も書けない	合計
小学校入学前のみ	12	5	0	1	18
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	20	2	2	0	24
合計	32	7	2	1	42
小学校入学前のみ	66.7%	27.8%	0.0%	5.6%	100.0%
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	83.3%	8.3%	8.3%	0.0%	100.0%
合計	76.2%	16.7%	4.8%	2.4%	100.0%

p=0.136

表 2-1-26 サーミ語の学習経験（「父親」）×サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	合 計
父親 ×	9	2	5	2	18
父親 ○	32	5	3	0	40
合計	41	7	8	2	58
父親 ×	50.0%	11.1%	27.8%	11.1%	100.0%
父親 ○	80.0%	12.5%	7.5%	0.0%	100.0%
合計	70.7%	12.1%	13.8%	3.4%	100.0%

p=0.035

読むこと	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	合 計
父親 ×	9	7	2	0	18
父親 ○	34	2	2	1	39
合計	43	9	4	1	57
父親 ×	50.0%	38.9%	11.1%	0.0%	100.0%
父親 ○	87.2%	5.1%	5.1%	2.6%	100.0%
合計	75.4%	15.8%	7.0%	1.8%	100.0%

p=0.007

聞くこと	たいいていのことならわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことならわかる	ほとんど何もわからない	合 計
父親 ×	7	6	3	1	17
父親 ○	28	11	0	0	39
合計	35	17	3	1	56
父親 ×	41.2%	35.3%	17.6%	5.9%	100.0%
父親 ○	71.8%	28.2%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	62.5%	30.4%	5.4%	1.8%	100.0%

p=0.011

書くこと	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字が書ける	何も書けない	合 計
父親 ×	8	8	1	0	17
父親 ○	31	5	2	1	39
合計	39	13	3	1	56
父親 ×	47.1%	47.1%	5.9%	0.0%	100.0%
父親 ○	79.5%	12.8%	5.1%	2.6%	100.0%
合計	69.6%	23.2%	5.4%	1.8%	100.0%

p=0.042

表 2-1-27 サーミ語の学習経験（「祖父」）×サーミ語能力の自己評価（除：無回答・非該当）

話すこと	流暢に話せる	かなり話せる	簡単な内容なら話せる	ほとんど話せない	合 計
祖父 ×	13	4	7	2	26
祖父 ○	28	3	1	0	32
合計	41	7	8	2	58
祖父 ×	50.0%	15.4%	26.9%	7.7%	100.0%
祖父 ○	87.5%	9.4%	3.1%	0.0%	100.0%
合計	70.7%	12.1%	13.8%	3.4%	100.0%

p=0.008

読むこと	本が読める	簡単な雑誌が読める	文字が読める	何も読めない	合 計
祖父 ×	12	8	4	1	25
祖父 ○	31	1	0	0	32
合計	43	9	4	1	57
祖父 ×	48.0%	32.0%	16.0%	4.0%	100.0%
祖父 ○	96.9%	3.1%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	75.4%	15.8%	7.0%	1.8%	100.0%

p=0.000

聞くこと	たいいていのことならわかる	日常生活の話題がわかる	基本的なことならわかる	ほとんど何もわからない	合 計
祖父 ×	10	12	3	1	26
祖父 ○	25	5	0	0	30
合計	35	17	3	1	56
祖父 ×	38.5%	46.2%	11.5%	3.8%	100.0%
祖父 ○	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	62.5%	30.4%	5.4%	1.8%	100.0%

p=0.004

書くこと	どんな文書でも書ける	簡単なメモが書ける	文字が書ける	何も書けない	合 計
祖父 ×	11	10	3	1	25
祖父 ○	28	3	0	0	31
合計	39	13	3	1	56
祖父 ×	44.0%	40.0%	12.0%	4.0%	100.0%
祖父 ○	90.3%	9.7%	0.0%	0.0%	100.0%
合計	69.6%	23.2%	5.4%	1.8%	100.0%

p=0.002

ところで、先に確認したようにサーミ語の学習経験の回答パターンは、「小学校入学前」のみ回答する者と、「小学校入学前」「小学校のころ」「中学校のころ」の3つすべてに回答する者の2つが多数を占めていた。そこで、それらに言語能力の相違が見られるかを見るため表2-1-25を作成した。そこからは、「話すこと」「読むこと」「聞くこと」「書くこと」のいずれにおいても、「小学校入学前」「小学校のころ」「中学校のころ」の3つすべてに回答する者のほうが言語能力を高く評価している傾向が見られるものの、「読むこと」のみでしか有意でなく、さらにその場合も10%水準で有意である。ここからは、両者には相違があるとは強くはいえないだろう。

他方で、教えられた人の違いの場合、とくに家族のうち男性の家族からサーミ語を教えられた者ほど、サーミ語能力の自己評価が高くなるという傾向が見られる。表2-1-26を見よう。そこには「父親」とサーミ語能力の自己評価とのクロス表を整理した。たとえば、「書くこと」を見ると、「父親」からサーミ語を教わった者のうち79.5%が「どんな文章でも書ける」と回答しているのに対し、「父親」から教わっていない者は47.1%しか「どんな文章でも書ける」と回答していないのである。こうした傾向は他の言語の側面でも同様に見られる。また、表2-1-27から「祖父」の場合を見ても同様の解釈ができる。こうした結果は、サーミ語を習得する際において男性家族のかかわりの重要性を示唆しているのかもしれない。

(2) サーミ文化

次に、サーミ文化について確認していこう。まず、サーミ高校の高校生はいつ頃にサーミ文化を学ぶのだろうか。表2-1-28からは、「小学校入学前」が53.1%、「小学校の頃」が46.9%、「中学校のころ」が51.6%、とそれら3者がほぼ同程度に回答されていることがわかる。サーミ語の経験の場合、「小学校入学前」がとりわけ高く回答されていた点を踏まえると、この点はサーミ文化の学習の特徴といえるかもしれない。

続けて、表2-1-29から複数回答の回答パターンを見ると、「小学校入学前」「小学校のころ」「中学校のころ」を3つとも回答している者が25.0%、「小学校入学前」のみ回答している者が21.9%と高く回答されている。その意味で、サーミ語の経験の場合と同様の特徴が見られる。

しかし、ここでは「いつごろかわからない」と回答する者が17.2%と3番目に多いことに注目すべきだろう。なぜなら、サーミ語の経験の場合、再度表2-1-20を見ればわかるように「いつごろかわからない」が2.9%にすぎないからである。ここからは、サーミ文化の学習経験は、サーミ語の学習経験と比べて、「いつごろかわからない」という評価がもたれやすいほど、日常生活に「溶け込んでいる」ものである可能性が示唆される。

次に、表2-1-30からサーミ文化を誰から教わったのかを見よう。ここからは、サーミ語の場合と同様、基本的には周囲の大人から偏りなくサーミ文化を教わっていることがわかる。しかし、サーミ語の場合と比べると、「小学校の先生」や「中学校の先生」から教わったと回答する者が相対的に低くなっている点には注目したほうがよいかもしれない。たとえば、先に見たように「小学校の先生」からサーミ語を教わったと回答する者は、「母親」について2番目に多かった。しかし、サーミ文化の場合には5番目に多く回答されるにすぎない。このように見れば、サーミ文化の学習経験は、相対的にいえば主に家族によって教えられているといえよう。

なお表2-1-31の複数回答の回答パターンも確認しておくと、すべての選択肢に回答している者が16.4%、「きょうだい」以外の選択肢にすべて回答している者が13.1%と多い。

表2-1-28 サーミ文化の経験（複数回答計）（除：無回答・非該当）

	度 数	割 合
小学校入学前	34	53.1%
小学校の頃	30	46.9%
中学校の頃	33	51.6%
いつごろかわからない	11	17.2%
学んでいない	3	4.7%
回答者計	64	100.0%

表 2-1-29 サーミ文化の経験（回答パターン）（除：無回答・非該当）（N = 64）

小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	学んでいない	度 数	割 合
○	○	○			16	25.0%
○					14	21.9%
			○		11	17.2%
		○			8	12.5%
	○	○			7	10.9%
	○				3	4.7%
				○	3	4.7%
○	○				2	3.1%

表 2-1-30 サーミ文化を教わった人
（複数回答計）（除：無回答・非該当）

	度 数	割 合
父親	43	70.5%
母親	44	72.1%
祖父	33	54.1%
祖母	41	67.2%
親戚	38	62.3%
きょうだい	26	42.6%
小学校の先生	37	60.7%
中学校の先生	34	55.7%
その他	8	13.1%
回答者計	61	100.0%

表 2-1-31 サーミ文化を教わった人（回答パターン）（除：無回答・「その他」）（N = 61）

父 親	母 親	祖 父	祖 母	親 戚	きょうだい	小学校の先生	中学校の先生	度 数	割 合
○	○	○	○	○	○	○	○	10	16.4%
○	○	○	○	○		○	○	8	13.1%
○	○	○	○	○	○			5	8.2%
	○	○	○	○	○	○	○	4	6.6%
○	○							3	4.9%
						○		3	4.9%
○								2	3.3%
	○							2	3.3%
						○	○	2	3.3%
○	○					○	○	2	3.3%
○	○		○	○				2	3.3%
			○					2	3.3%
	○		○	○	○	○	○	1	1.6%
							○	1	1.6%
○	○	○		○	○			1	1.6%
○	○	○		○		○	○	1	1.6%
○	○		○	○	○	○	○	1	1.6%
○	○		○	○	○	○		1	1.6%
○	○		○					1	1.6%
○		○	○			○	○	1	1.6%
○			○	○	○			1	1.6%
○					○	○	○	1	1.6%
	○		○					1	1.6%
			○			○	○	1	1.6%
○	○	○	○	○				1	1.6%
○		○	○	○	○	○		1	1.6%
○				○			○	1	1.6%
		○						1	1.6%

それでは、こうしたサーミ文化の学習経験は、サーミ語の学習経験とどのように関連しているのだろうか。表2-1-32を見よう。そこには、見やすさを考慮し再カテゴリ化した⁹⁾、サーミ語の学習時期の回答パターンとサーミ文化の学習時期の回答パターンのクロス表を整理した。それによれば、サーミ語の学習経験とサーミ文化の学習経験は、ほぼ同時期になされていることがわかる。たとえば、サーミ語の学習経験を「小学校のころ and/or 中学校のころ」と回答している者の77.8%が、サーミ文化の学習経験も「小学校のころ and/or 中学校のころ」と回答している。

表2-1-32 サーミ語の学習経験×サーミ文化の学習経験（除：無回答）

サーミ語 \ サーミ文化	小学校入学前	小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ	小学校のころ and/or 中学校のころ	いつごろかわからない	高校入学前に サーミ言語は 学んでいない	合 計
小学校入学前	14		4	2	1	21
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ		16	7	5		28
小学校のころ and/or 中学校のころ		1	7	1		9
いつごろかわからない		1				1
高校入学前にサーミ言語は学んでいない					1	1
合計	14	18	18	8	2	60
小学校入学前	66.7%		19.0%	9.5%	4.8%	100.0%
小学校入学前 小学校のころ 中学校のころ		57.1%	25.0%	17.9%		100.0%
小学校のころ and/or 中学校のころ		11.1%	77.8%	11.1%		100.0%
いつごろかわからない		100.0%		0.0%		100.0%
高校入学前にサーミ言語は学んでいない					100.0%	100.0%
合計	23.3%	30.0%	30.0%	13.3%	3.3%	100.0%

表2-1-33 サーミ語を教わった人×サーミ文化を教わった人（除：無回答・非該当）

		サーミ文化			構成比		
		父親 ×	父親 ○	合 計	父親 ×	父親 ○	合 計
サーミ語	父親 ×	15	1	16	93.8%	6.3%	100.0%
	父親 ○	2	41	43	4.7%	95.3%	100.0%
合計		17	42	59	28.8%	71.2%	100.0%
p=0.000							
		度 数			構成比		
		母親 ×	母親 ○	合 計	母親 ×	母親 ○	合 計
サーミ語	母親 ×	14	2	16	87.5%	12.5%	100.0%
	母親 ○	2	41	43	4.7%	95.3%	100.0%
合計		16	43	59	27.1%	72.9%	100.0%
p=0.000							
		度 数			構成比		
		祖父 ×	祖父 ○	合 計	祖父 ×	祖父 ○	合 計
サーミ語	祖父 ×	25	1	26	96.2%	3.8%	100.0%
	祖父 ○	2	31	33	6.1%	93.9%	100.0%
合計		27	32	59	45.8%	54.2%	100.0%
p=0.000							
		度 数			構成比		
		祖母 ×	祖母 ○	合 計	祖母 ×	祖母 ○	合 計
サーミ語	祖母 ×	17	1	18	94.4%	5.6%	100.0%
	祖母 ○	3	38	41	7.3%	92.7%	100.0%
合計		20	39	59	33.9%	66.1%	100.0%
p=0.000							
		度 数			構成比		
		親戚 ×	親戚 ○	合 計	親戚 ×	親戚 ○	合 計
サーミ語	親戚 ×	19	3	22	86.4%	13.6%	100.0%
	親戚 ○	3	34	37	8.1%	91.9%	100.0%
合計		22	37	59	37.3%	62.7%	100.0%
p=0.000							

	きょうだい ×	きょうだい ○	合 計	きょうだい ×	きょうだい ○	合 計
サーミ語 きょうだい ×	31	1	32	96.9%	3.1%	100.0%
きょうだい ○	3	24	27	11.1%	88.9%	100.0%
合計	34	25	59	57.6%	42.4%	100.0%
p=0.000						
	小学校の先生 ×	小学校の先生 ○	合 計	小学校の先生 ×	小学校の先生 ○	合 計
サーミ語 小学校の先生 ×	18	1	19	94.7%	5.3%	100.0%
小学校の先生 ○	5	35	40	12.5%	87.5%	100.0%
合計	23	36	59	39.0%	61.0%	100.0%
p=0.000						
	中学校の先生 ×	中学校の先生 ○	合 計	中学校の先生 ×	中学校の先生 ○	合 計
サーミ語 中学校の先生 ×	19	2	21	90.5%	9.5%	100.0%
中学校の先生 ○	7	31	38	18.4%	81.6%	100.0%
合計	26	33	59	44.1%	55.9%	100.0%
p=0.000						

さらに、ここからは、サーミ文化の経験ほど、年齢が上がってから経験される傾向も一定程度存在することもわかる。サーミ語の学習経験が「小学校入学前」のうちの19.0%の者が、サーミ文化の学習経験は「小学校入学前のころ and/or 中学校のころ」となっているからである。

他方で、サーミ語を教わった人とサーミ文化を教わった人との関連については、おおよそサーミ語を教わっていればサーミ文化も教わっているという関連が見られる。表2-1-33を見よう。たとえば「父親」をみると、「父親」からサーミ語を教わっている者の95.3%が、「父親」からサーミ文化も教わっているのである。こうした傾向は教わった人すべてにおいて確認することができる。

(3) アイデンティティ

最後に、サーミとしてのアイデンティティについて確認しよう。表2-1-34によれば、自分をサーミだと「つねに意識している」者が76.8%と最も多く回答されている。そしてこうした意識は、表2-1-35からわかるように「家族でサーミのことを話題にするとき」(65.2%)や「家族でサーミの文化を実践するとき」(54.5%)など家族や文化との関わりや、「サーミ語に触れたとき」(53.0%)などの言語に触れた際にとくに強く意識されている。

それゆえ、サーミ語能力の自己評価とアイデンティティのあり方は関連している。表2-1-36を見よう。そこには、サーミ語能力の自己評価×アイデンティティのクロス表を整理した¹⁰⁾。たとえば、「話すこと」を見ると、「流暢に話せる」者の97.6%がサーミであることを「つねに意識している」のに対し、「簡単な内容なら話せる／ほとんど話せない」者は27.3%しか「つねに意識している」と回答されていない。ここからは、言語能力が高いものほどサーミであることをつねに意識していることがわかる。そして、こうした傾向は、基本的には他の言語の側面においてもあてはまる。

表2-1-34 サーミとして意識することがあるか (除：無回答)

	度 数	構成比
つねに意識している	53	76.8%
意識することが多い	9	13.0%
時々意識する	3	4.3%
まったく意識しない	4	5.8%
回答数	69	100.0%

表2-1-35 サーミとして意識する時（複数回答計）（除：無回答・非該当）

	度 数	構成比
家族でサーミのことを話題にするとき	43	65.2%
家族でサーミの文化を実践するとき	36	54.5%
家族以外のサーミの人々に関わるとき	34	51.5%
サーミ以外の人々に関わるとき	27	40.9%
サーミの文化や歴史に触れたとき	31	47.0%
サーミ語に触れたとき	35	53.0%
サーミの人々の身体的特徴に気づいたとき	17	25.8%
サーミであることで差別を受けたとき	16	24.2%
その他	5	7.6%
回答者計	66	100.0%

表2-1-36 サーミ語能力の自己評価×サーミとして意識することがあるか（除：無回答）

話すこと	つねに意識 している	それ以外	合 計	つねに意識 している	それ以外	合 計
流暢に話せる	40	1	41	97.6%	2.4%	100.0%
かなり話せる	5	1	6	83.3%	16.7%	100.0%
簡単な内容なら話せる / ほとんど話せない	3	8	11	27.3%	72.7%	100.0%
合計	48	10	58	82.8%	17.2%	100.0%
p=0.000						
読むこと	つねに意識 している	それ以外	合 計	つねに意識 している	それ以外	合 計
本が読める	38	3	41	92.7%	7.3%	100.0%
簡単な雑誌が読める	4	7	11	36.4%	63.6%	100.0%
文字が読める / 何も読めない	5	1	6	83.3%	16.7%	100.0%
合計	47	11	58	81.0%	19.0%	100.0%
p=0.000						
聞くこと	つねに意識 している	それ以外	合 計	つねに意識 している	それ以外	合 計
たいていのことならわかる	31	3	34	91.2%	8.8%	100.0%
日常生活の話題がわかる	14	3	17	82.4%	17.6%	100.0%
基本的なことならわかる / ほとんど何もわからない	1	5	6	16.7%	83.3%	100.0%
合計	46	11	57	80.7%	19.3%	100.0%
p=0.000						
書くこと	つねに意識 している	それ以外	合 計	つねに意識 している	それ以外	合 計
どんな文書でも書ける	36	2	38	94.7%	5.3%	100.0%
簡単なメモが書ける	7	7	14	50.0%	50.0%	100.0%
文字が書ける / 何も書けない	3	2	5	60.0%	40.0%	100.0%
合計	46	11	57	80.7%	19.3%	100.0%
p=0.000						

表 2-1-37 サーミとして意識する時（回答パターン）（除：無回答・非該当）（N=66）

家族でサーミの ことを話題に するとき	家族でサーミ の文化を実践 するとき	家族以外の サーミの人々 と関わる時	サーミ以外 の人々と 関わる時	サーミの文化 や歴史に触れ たとき	サーミ語に 触れたとき	サーミの人々の 身体的特徴に 気づいたとき	サーミである ことで差別を 受けたとき	度 数	構成比
○	○							4	7.0%
○								4	7.0%
○	○	○		○	○			4	7.0%
○	○	○	○	○	○		○	4	7.0%
○	○	○	○	○	○	○	○	3	5.3%
○	○	○	○	○	○	○		3	5.3%
○	○	○	○	○	○			2	3.5%
			○					2	3.5%
○	○	○	○		○			2	3.5%
○	○	○		○	○	○	○	2	3.5%
○	○	○			○		○	2	3.5%
								2	3.5%
							○	1	1.8%
○	○		○	○		○	○	1	1.8%
○		○	○	○		○		1	1.8%
	○		○					1	1.8%
○	○	○	○	○				1	1.8%
○	○	○		○	○	○		1	1.8%
○	○	○		○	○			1	1.8%
○	○				○			1	1.8%
○	○				○	○	○	1	1.8%
○		○	○		○	○		1	1.8%
○		○	○					1	1.8%
○		○						1	1.8%
○				○	○	○	○	1	1.8%
○						○		1	1.8%
	○	○	○	○	○			1	1.8%
	○	○		○	○			1	1.8%
		○	○	○				1	1.8%
		○	○		○			1	1.8%
		○		○	○	○		1	1.8%
			○	○	○		○	1	1.8%
					○	○		1	1.8%
					○			1	1.8%

ただし、言語の4つの側面のうち「読むこと」や「書くこと」に関して、言語能力が低い者においても、相対的に「つねに意識している」者が多く見られるという点には留意したほうがよいのかもしれない。たとえば、「読むこと」を見ると、「文字が読める／何も読めない」者においても83.3%の者がサーミであることを「つねに意識している」。ここからは、相対的にいって、「読むこと」「書くこと」という言語の側面において、言語能力とアイデンティティの関連は弱いということが示唆されよう。このことは、逆にいえば、とくに「話すこと」「聞くこと」に関して、サーミ語能力とアイデンティティのあり方にはとくに強い関連が見られる。これは、日常生活でより使用するのが言語の側面のうち「話すこと」「聞くこと」であるからかもしれない。

なお、表2-1-37から回答の組み合わせを確認すると、回答率が最も高い組み合わせでも「家族でサーミのことを話題にするとき」「家族でサーミの文化を実践するとき」の2つを回答しているなどの7.0%にすぎず、多様なパターンが存在している。

では、いつ頃からサーミであることを自覚したのだろうか。表2-1-38を見よう。それによ

れば、「小学校入学前から」が77.9%と最も高く回答されており、かなり小さい頃からサーミであるというアイデンティティを持っていることがわかる。そして、表2-1-39からわかるように、こうした自覚が早いほど、サーミであることを「つねに意識している」。

表2-1-38 サーミであることをいつから意識したか（除：無回答）

	度 数	構成比
小学校入学前から	53	77.9%
小学校の頃	5	7.4%
中学校の頃	0	0.0%
いつごろかわからない	6	8.8%
サーミだと思ってない	4	5.9%
回答数	68	100.0%

表2-1-39 サーミであることをいつから意識したか×サーミとして意識することがあるか（除：無回答）

	サーミとして意識することがあるか			構成比		
	度 数			度 数		
	つねに意識している	それ以外	合 計	つねに意識している	それ以外	合 計
小学校入学前から	46	7	53	86.8%	13.2%	100.0%
それ以外	7	7	14	50.0%	50.0%	100.0%
合計	53	14	67	79.1%	20.9%	100.0%

p=0.006

さらに、サーミであることの自覚は、どのような経緯でなされたのだろうか。表2-1-40からわかるように、「親から聞いた」がとりわけ80.6%と高くなっている。他方で、表2-1-41から複数回答のパターンを確認すると、「親から聞いた」が41.9%と最も高いものの、「その他」が14.5%と次に多くなっている。

そこで「その他」の内容を具体的に確認すると、

「生まれたときから」

「サーミとして生まれたから」

「つねに感じている」

「すべての出来事から」

「サーミ文化の中で育った」

などの記述が見られ、その意味で、生育・生活環境が総体的にサーミであることの自覚を促したことが示唆されよう。

こうした点は、サーミ語やサーミ文化の学習経験とくらべてみるとより明らかになる。表2-1-42にサーミ語の学習時期・サーミ文化の学習時期とサーミであることを自覚した時期のクロス表を整理した¹¹⁾。ここからは、基本的にはサーミ語やサーミ文化を学習したときに、サーミとしてのアイデンティティを自覚したことがわかる。たとえば、サーミ語の学習経験を見ると、それが「小学校入学前」の者の81.6%が、サーミとしてのアイデンティティも「小学校入学前」に自覚している。

しかし、たとえば、サーミ文化の学習経験を見ると、それを「小学校のころ」に経験した者の70.0%が、サーミとしてのアイデンティティは「小学校入学前」に自覚している。こうした点は、サーミ語の場合でも見られる。ここからは、サーミ語やサーミ文化の学習経験よりも前に、サーミとし

てのアイデンティティを自覚した者が存在してもいることが示唆されよう。

最後に、表2-1-43から、今後、どのように生活していきたいと考えているのかを見ると、「サーミとして積極的に生活したい」が58.2%と最も高く回答されている。その際の理由としては、

表2-1-40 サーミであることを意識したきっかけ（複数回答計）（除：無回答）

	度 数	構成比
親から聞いた	50	80.6%
親以外の家族・親戚から聞いた	17	27.4%
近所の人から聞いた	5	8.1%
友だちから指摘された	8	12.9%
学校の先生に指摘された	7	11.3%
身体的特徴に気づいた	9	14.5%
その他	18	29.0%
回答者計	62	100.0%

表2-1-41 サーミであることを意識したきっかけ（回答パターン）（除：無回答）（N = 62）

親から聞いた	親以外の家族・親戚から聞いた	近所の人から聞いた	友だちから指摘された	学校の先生に指摘された	身体的特徴に気づいた	その他	度 数	構成比
○							26	41.9%
						○	9	14.5%
○	○						6	9.7%
○					○		3	4.8%
○						○	3	4.8%
○	○	○	○	○	○		2	3.2%
○	○					○	2	3.2%
					○		2	3.2%
○	○	○	○	○	○	○	1	1.6%
○	○	○	○	○		○	1	1.6%
○	○	○	○				1	1.6%
○	○		○	○		○	1	1.6%
○	○		○	○			1	1.6%
○	○				○		1	1.6%
○			○			○	1	1.6%
○				○			1	1.6%
	○						1	1.6%

表2-1-42 サーミ語（文化）の学習経験×サーミであることをいつから自覚したか（除：無回答）

サーミ語の学習経験	小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	サーミだと思っていない	合 計	小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	サーミだと思っていない	合 計
小学校入学前	40	4	0	4	1	49	81.6%	8.2%			2.0%	100.0%
小学校のころ	9	0	0	1	1	11	81.8%	0.0%		9.1%	9.1%	100.0%
中学校のころ	1	1	0	0	0	2				0.0%		100.0%
いつごろかわからない	0	0	0	1	0	1	0.0%				0.0%	100.0%
高校入学前に、サーミの言葉は学んでいない	1	0	0	0	1	2	50.0%	0.0%		0.0%	50.0%	100.0%
合計	51	5	0	6	3	65	78.5%	7.7%		9.2%	4.6%	100.0%

サーミ文化の学習経験	小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	サーミだと思っていない	合 計	小学校入学前	小学校のころ	中学校のころ	いつごろかわからない	サーミだと思っていない	合 計
小学校入学前	28	1	0	2	0	31	90.3%	3.2%			0.0%	100.0%
小学校のころ	7	2	0	0	1	10	70.0%	20.0%		0.0%	10.0%	100.0%
中学校のころ	5	2	0	1	0	8				12.5%		100.0%
いつごろかわからない	7	0	0	2	0	9	77.8%				0.0%	100.0%
高校入学前に、サーミの言葉は学んでいない	1	0	0	0	2	3	33.3%	0.0%		0.0%	66.7%	100.0%
合計	48	5	0	5	3	61	78.7%	8.2%		8.2%	4.9%	100.0%

表 2-1-43 今後どのように生きていきたいか（除：無回答）

	度 数	構成比
サーミとして積極的に生活したい	39	58.2%
とくに民族は意識せず生活したい	18	26.9%
サーミであることを知られないように生活したい	1	1.5%
その他	9	13.4%
回答数	67	100.0%

表 2-1-44 サーミとして意識することがあるか×今後どのように生きていきたいか（除：無回答）

	今後どのように生きていきたいか			構成比		
	サーミとして積極的に生活したい	それ以外	合 計	サーミとして積極的に生活したい	それ以外	合 計
つねに意識している	36	14	50	72.0%	28.0%	100.0%
それ以外	2	14	16	12.5%	87.5%	100.0%
合計	38	28	66	57.6%	42.4%	100.0%

p=0.000

「私はサーミを誇りに思っている。」

「(サーミが) 好きだから」

などサーミであることを肯定的に感じていることを理由としてあげる例が多く見られる。

ただし、「とくに民族は意識せず生活したい」と考えている者も 26.9%と一定数見られる点には留意したほうがよい。

とはいえ、この将来展望は、いうまでもなく現在のサーミとしてのアイデンティティと関連している。表 2-1-44 を見よう。そこからは、サーミであることを「つねに意識している」者ほど、「サーミとして積極的に生活したい」と考えていることがわかる。

第 3 項 学校生活・将来展望と言語・文化・アイデンティティとの関連

(1) 学校生活と言語・文化・アイデンティティとの関連

以上、サーミ高校に通う高校生の学校生活・将来展望と言語・文化・アイデンティティについて検討してきた。では、これらには関連が見られるのだろうか。

まず、第 1 に、サーミ高校への進学理由とサーミ語の学習時期には関連が見られる。具体的には、進学理由のうち「サーミ語の力を高めたいから」が、サーミ語の学習時期と関連している。表 2-1-45 には、「サーミ語の力を高めたいから」とサーミ語の学習時期が「小学校入学前」かどうかのクロス表を整理した。それによれば、サーミ語の学習時期が遅かった者ほど、「サーミ語の力を高めたい」という理由でサーミ高校へ入学していることがわかる。具体的な値を確認すると、「小学校入学前」にサーミ語の学習経験がある者のうち 7.7%しか「サーミ語の力を高めたい」という理由で高校に入学していないのに対し、「小学校入学前」にサーミ語の学習経験がない場合では 29.4%の者がそうした理由でサーミ高校へ入学している。

先に見たように、サーミ語を「小学校入学前」に経験した者ほど、サーミ語能力の自己評価が高かった。この点をふまえれば、「小学校入学前」にサーミ語を学習していないためサーミ語の能力に対する自己評価が低く、その能力を高めるためにサーミ高校へ入学した者が存在していると解釈

できるかもしれない。

そして、そうした入学理由は一定程度かなえられているといえる。表2-1-46を見よう。そこには、高校への評価のうち「サーミ語を身につけられる」とサーミ語の学習経験が「小学校入学前」かどうかのクロス表を示した¹²⁾。ここからは、その2変数には関連が見られないことがわかる。すなわち、サーミ語の学習経験を「小学校入学前」にしない者でも、「小学校入学前」に経験した者とほぼ同等に9割程度の者が「サーミ語を身につけられる」とサーミ高校を評価している。この点は、「サーミ語の力を高めたい」という入学理由が一定程度達成していることを示唆しているのではないだろうか。

さらに、第2に、高校への評価と日常的に使用する言語にも関連が見られる。表2-1-47を見よう。そこには、日常的に使用する言語と、サーミ高校への評価（一部）のクロス表を整理した¹³⁾。そのなかの「サーミ語で学ぶので理解しやすい」を見よう。そこからは、主にサーミ語を日常的に使用している者ほど、「サーミ語で学ぶので理解しやすい」と回答する傾向が見られる。たとえば、主に「サーミ語」を使用している者を見ると73.3%の者が「サーミ語で学ぶので理解しやすい」と回答しているのに対し、主に「ノルウェー語」を使用している者では「サーミ語で学ぶので理解しやすい」と回答する者は18.2%しか存在しないのである。

以上のように見れば、サーミ高校は、一方で、サーミ語を相対的に遅く学習した者に対してはサーミ語を学習させる機会を提供するとともに、他方で、サーミ語を日常的に使用している者に対しては、学習の理解のしやすさを提供しているといえることができるかもしれない。

とはいえ、表2-1-47では、その他の設問には関連が見られないことにも注目をした方がよい。すなわち、高校への評価のうち「サーミ語を身につけられる」「サーミ文化を身につけられる」においては、日常的に使用する言語によって違いが見られない。他方で、「ノルウェー語が覚えられない」「ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない」などの設問でも、日常的に使用する言語によって評価の違いが見られないのである。

表2-1-45 「サーミ語の力を高めたいから」×サーミ語の学習経験（「小学校入学前」）（除：無回答）

	サーミ語の力を高めたいから			構成比		
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
小学校入学前 ×	12	5	17	70.6%	29.4%	100.0%
小学校入学前 ○	48	4	52	92.3%	7.7%	100.0%
合計	60	9	69	87.0%	13.0%	100.0%

p=0.035

表2-1-46 「サーミ語を身につけられる」×サーミ語の学習経験（「小学校入学前」）（除：無回答）

	サーミ語を身につけられる			構成比		
	度 数		合 計	構成比		合 計
	そう思う	そう思わない		そう思う	そう思わない	
小学校入学前 ×	13	1	14	92.9%	7.1%	100.0%
小学校入学前 ○	49	2	51	96.1%	3.9%	100.0%
合計	62	3	65	95.4%	4.6%	100.0%

p=0.523

表2-1-47 高校への評価（一部）×普段の使用言語（除：無回答）

	サーミ語を身につけられる							ノルウェー語が覚えられない					
	度 数			構成比				度 数			構成比		
	そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計		そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計
サーミ語	28	1	29	96.6%	3.4%	100.0%	サーミ語	1	29	30	3.3%	96.7%	100.0%
半々	14	1	15	93.3%	6.7%	100.0%	半々	1	15	16	6.3%	93.8%	100.0%
ノルウェー語	21	1	22	95.5%	4.5%	100.0%	ノルウェー語	1	21	22	4.5%	95.5%	100.0%
合計	63	3	66	95.5%	4.5%	100.0%	合計	3	65	68	4.4%	95.6%	100.0%
p=0.889							p=0.900						

p=0.889

p=0.900

	サーミ語で学ぶので理解しやすい						ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない						
	度 数			構成比			度 数			構成比			
	そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計	
サーミ語	22	8	30	73.3%	26.7%	100.0%	サーミ語	3	27	30	10.0%	90.0%	100.0%
半々	11	3	14	78.6%	21.4%	100.0%	半々	1	14	15	6.7%	93.3%	100.0%
ノルウェー語	4	18	22	18.2%	81.8%	100.0%	ノルウェー語	2	20	22	9.1%	90.9%	100.0%
合計	37	29	66	56.1%	43.9%	100.0%	合計	6	61	67	9.0%	91.0%	100.0%
p=0.000						p=0.934							

p=0.000

p=0.934

	サーミ文化を身につけられる					
	度 数			構成比		
	そう思う	そう思わない	合 計	そう思う	そう思わない	合 計
サーミ語	28	2	30	93.3%	6.7%	100.0%
半々	12	1	13	92.3%	7.7%	100.0%
ノルウェー語	19	3	22	86.4%	13.6%	100.0%
合計	59	6	65	90.8%	9.2%	100.0%

p=0.677

表2-1-48 高校への満足度（一部）×普段の使用言語（除：無回答）

	授業の内容				構成比		
	満 足	不 満	合 計		満 足	不 満	合 計
サーミ語	30	2	32		93.8%	6.3%	100.0%
半々	13	2	15		86.7%	13.3%	100.0%
ノルウェー語	22	1	23		95.7%	4.3%	100.0%
合計	65	5	70		92.9%	7.1%	100.0%

p=0.555

	専門的な知識や技術の獲得				構成比		
	満 足	不 満	合 計		満 足	不 満	合 計
サーミ語	26	6	32		81.3%	18.8%	100.0%
半々	10	4	14		71.4%	28.6%	100.0%
ノルウェー語	19	4	23		82.6%	17.4%	100.0%
合計	55	14	69		79.7%	20.3%	100.0%

p=0.684

さらに、表2-1-48から高校への満足度と日常的に使用する言語のクロス表（一部）も見てみよう。そこからも、「授業の満足度」と「専門的な知識や技術の獲得」に関して、使用する言語によって違いがあるとはいいがたい。

以上のように見れば、サーミ高校は、たしかに「サーミ語」を主に使用する者に対して理解のしやすさを提供しているものの、一方で、「ノルウェー語」を主に使用する者が、サーミの言葉や文化を身につけにくいというわけではなく、また授業や専門的な知識や技術の取得も「サーミ語」を

主に使用している者と同程度に満足していることがわかり、他方で、「サーミ語」を主に使用する者がノルウェーの言葉や文化を身につけにくいわけでもないということがわかる。

（２）将来展望と言語・文化・アイデンティティとの関連

次に、将来展望と言語・文化・アイデンティティには関連が見られるのだろうか。まず、将来就きたい仕事・職業を見てみよう。そのうち注目すべきは、サーミの伝統的な仕事といえるトナカイ業であろう。先ほど見たようにそれに回答する者は少ないが、試みに検討してみる。こうした職業希望ととくに関連すると思われるのは将来サーミとしてどのように生きていきたいかという点だろう。そこで、将来就きたい仕事・職業としてのトナカイ業と将来どのように生きて行きたいかのクロス表を表 2-1-49 に示した¹⁴⁾。

それによれば、「トナカイ業」を回答している者の多く（４名／５名）が、「サーミとして積極的に生活したい」と考えている。その意味で、サーミとしてのアイデンティティとトナカイ業は関連している。しかし、残りの１名は「とくに民族は意識せずしたい」と回答している。その意味で、サーミの伝統的な仕事とサーミとしてのアイデンティティには関連が見られない。また $p = 0.505$ であり有意な違いがあるとはいえない。これらの点をふまえると確定的なことはいいがたいだろう。

ただし、将来展望とサーミとして今後どのように生きて行きたいかに明確な関連が見られる側面もある。表 2-1-50 には、今後どのように生きて行きたいかと就職を希望する地域（一部）のクロス表を示した¹⁵⁾。そのうち、「トロムソ」や「オスロ」に関しては大きな違いは見られないものの、「フィンマルク県」を見ると、「サーミとして積極的に生活したい」者のうち 89.3% が、就職を希望する地域として「フィンマルク県」を回答しているのに対し、それ以外の者は 50.0% にすぎないことがわかる。その意味で、将来展望と今後サーミとしてどのように生きて行きたいかには関連がみられる。

表 2-1-49 将来就きたい仕事・職業（トナカイ業）×今後どのようにして生きていきたいか（除：無回答）

	トナカイ業			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	25	4	29	86.2%	13.8%	100.0%
特に民族は意識せず生活したい	13	1	14	92.9%	7.1%	100.0%
それら以外	7	0	7	100.0%	0.0%	100.0%
合計	45	5	50	90.0%	10.0%	100.0%

$p=0.505$

表 2-1-50 就職を希望する地域×今後どのように生きていきたいか（除：無回答）

	フィンマルク県			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	3	25	28	10.7%	89.3%	100.0%
それ以外	10	10	20	50.0%	50.0%	100.0%
合計	13	35	48	27.1%	72.9%	100.0%
p=0.004						
	トロムス			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	16	12	28	57.1%	42.9%	100.0%
それ以外	12	8	20	60.0%	40.0%	100.0%
合計	28	20	48	58.3%	41.7%	100.0%
p=1.000						
	オスロ			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	21	7	28	75.0%	25.0%	100.0%
それ以外	14	6	20	70.0%	30.0%	100.0%
合計	35	13	48	72.9%	27.1%	100.0%
p=0.750						

表 2-1-51 将来どこで暮らしたいか（一部）×今後どのように生きていきたいか（除：無回答）

	出身地			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	27	9	36	75.0%	25.0%	100.0%
それ以外	22	6	28	78.6%	21.4%	100.0%
合計	49	15	64	76.6%	23.4%	100.0%
p=0.775						
	カラシヨーク			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	17	19	36	47.2%	52.8%	100.0%
それ以外	20	8	28	71.4%	28.6%	100.0%
合計	37	27	64	57.8%	42.2%	100.0%
p=0.075						
	オスロ			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	26	10	36	72.2%	27.8%	100.0%
それ以外	22	6	28	78.6%	21.4%	100.0%
合計	48	16	64	75.0%	25.0%	100.0%
p=0.772						
	トロムソ			構成比		
	×	○	合 計	×	○	合 計
サーミとして積極的に生活したい	21	15	36	58.3%	41.7%	100.0%
それ以外	20	8	28	71.4%	28.6%	100.0%
合計	41	23	64	64.1%	35.9%	100.0%
p=0.307						

さらに、将来どこで暮らしたいかとのクロス表を示した表 2-1-51 を見ると、「オスロ」「トロムソ」などでは違いが見られないものの、「カラシヨーク」を見ると、10% 有意ではあるものの、「サーミとして積極的に生活したい」者ほど「カラシヨーク」と回答している。これらからは、サーミとして積極的に生活したいと考えている者ほど、フィンマルク県内で生活したいと考えているこ

とがうかがわれよう。

以上のようにみれば、今後サーミとしてどのように生きて行きたいかという意識は、一方で職業に関してはたしかなことはいいがたいものの、他方で地域に関しては現在居住しているフィンマルク県で生活するという意識と関連しているということができよう。

ところで、こうした将来住みたい地域に関しては、使用する言語も関連している可能性があるだろう。なぜなら、たとえば、一方で、主にノルウェー語を使用している者は、サーミ語があまり使われないだろうサーミ集住地以外の地域での生活に対応しやすく、他方で、主にサーミ語を使用している者はサーミ語があまり使われないだろうサーミ集住地以外の地域での生活に対応しにくいと考えられるからである。逆にいえば、サーミ語を使用する者ほどサーミ集住地での生活の方を選好するだろう。

そこで、この点を検討するため表2-1-52に日常的に使用している言語と就職を希望する地域のクロス表を整理した。そこには、サーミ集住地の代表例として「フィンマルク」を、サーミ集住地以外の代表例として「オスロ」への回答を示してある。しかし、両者ともに関連があるとはいえない。たとえば、サーミ集住地ではないノルウェーの首都である「オスロ」を見ると、たしかに主に「サーミ語」を使用する者で17.4%、サーミ語とノルウェー語が「半々」の者で45.5%、主に「ノルウェー語」を使用する者で27.8%となっているものの有意な違いは見られない。

さらに、表2-1-53から将来住みたい地域とのクロス表を見てみよう。そこから「オスロ」で将来生活したい者は、「サーミ語」を使用する者で23.3%、サーミ語とノルウェー語が「半々」の者で25.0%、「ノルウェー語」を使用する者で27.3%となっており、有意な違いがあるとはいえない。また、「出身地」や「カラショーク」をみても同様に違いがあるとはいえない。

以上からは、使用言語によっては、将来住みたい地域に違いがあるとはいいがたいだろう。

表2-1-52 使用言語×就職を希望する地域（一部）（除：無回答）

	フィンマルク					
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
サーミ語	5	18	23	21.7%	78.3%	100.0%
半々	2	9	11	18.2%	81.8%	100.0%
ノルウェー語	7	11	18	38.9%	61.1%	100.0%
合計	14	38	52	26.9%	73.1%	100.0%
p=0.359						
	オスロ					
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
サーミ語	19	4	23	82.6%	17.4%	100.0%
半々	6	5	11	54.5%	45.5%	100.0%
ノルウェー語	13	5	18	72.2%	27.8%	100.0%
合計	38	14	52	73.1%	26.9%	100.0%
p=0.224						

表2-1-53 使用言語×将来どこで暮らしたいか（一部）（除：無回答）

	出身地					
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
サーミ語	22	8	30	73.3%	26.7%	100.0%
半々	13	3	16	81.3%	18.8%	100.0%
ノルウェー語	16	6	22	72.7%	27.3%	100.0%
合計	51	17	68	75.0%	25.0%	100.0%
p=0.803						
	カラシヨーク					
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
サーミ語	15	15	30	50.0%	50.0%	100.0%
半々	7	9	16	43.8%	56.3%	100.0%
ノルウェー語	15	7	22	68.2%	31.8%	100.0%
合計	37	31	68	54.4%	45.6%	100.0%
p=0.266						
	オスロ					
	度 数		合 計	構成比		合 計
	×	○		×	○	
サーミ語	23	7	30	76.7%	23.3%	100.0%
半々	12	4	16	75.0%	25.0%	100.0%
ノルウェー語	16	6	22	72.7%	27.3%	100.0%
合計	51	17	68	75.0%	25.0%	100.0%
p=0.949						

第4項 小括

以上、サーミ高校に通う高校生の学校生活・将来展望と言語・文化・アイデンティティについて検討してきた。知見を整理しよう。

まず、第1に、学校生活・将来展望については、(1) サーミ高校に通う高校生は、サーミ高校から全般的に高い満足感を得ていた。そうした意識はとくに、彼らが、サーミ語やサーミ文化をさらに習得できると評価している点に起因していよう。こうした評価は、早い時期からサーミ語やサーミ文化に慣れ親しんでいる者だけでなく、サーミ語の学習時期が遅かった者においてもなされていた。しかし、だからといってノルウェー語やノルウェーの習慣や文化の習得にも不利にはならないとも評価されていた。こうした点もサーミ高校への高い満足度をもたらしていよう。ただし、とくにサーミ語で学ぶことがサーミエリア以外の地域へと進学する際に不利になるかどうかという点において、評価が2つに割れていたことには留意する必要がある。

次に、(2) 彼らの将来展望をみると、まず、進路については、進学希望が多いこと、その進学希望先はトロムソ大学が多くを占めておりサーミ・ユニバーシティ・カレッジへの進学希望は見られないこと、大学では工学・理学系や医療関係を学びたい者が多いことなどが明らかになった。また、職業希望については、多様な希望が見られたものの、サーミの伝統的な仕事であるトナカイ飼育などを希望する者も存在していた。さらに、生活したい地域については、就職を希望する地域ではフィンマルク県が半数を占めていること、将来生活したい地域ではフィンマルク県内のカラシヨークが最も多く回答されていることが明らかになった。しかし、一定数の者は、トロムス県やオスロなどフィンマルク県以外の地域で生活したいとも考えている。

さらに、関連して、(3) 将来展望に関してはジェンダーによって大きく異なるとはいいがなかった。この点について、アンケート調査の対象地域ではないもののカウトケイノの高校教員へのヒアリングでは、女性は進学を目標とするコースに在籍するため進学を希望し、男性はトナカイ科や土木科に在籍するため大学に進学しにくいこと、さらにそのことを背景として、女性は大学へ行くことに伴い地域移動しカウトケイノからいなくなり、男性はカウトケイノに残る傾向がみられること、そうした結果、カウトケイノでは子どもを生むような年齢の女性が少なくなっているという印象が述べられていた¹⁶⁾。

ここでの調査結果からは、こうした印象は一部当てはまるといえる。たしかに、女性の方が進学を希望する割合が高く、さらにオスロ大学などに進学希望をする女性の割合が高かった。また、トナカイ飼育を希望する者の多くは男性だった。しかし、それらは有意な違いがあるとはいえなかった。ただし、将来住みたい地域においては、女性ほど出身地と回答してはいなかった。こうした点は、カウトケイノとカラショークの違いなのか、それとも地域移動の実際と将来展望との違いなのか、さらなる検討が必要だろう。

次に、第2に、言語・文化・アイデンティティについて、彼らは、(1) かなり早い時期にサーミ語やサーミ文化に触れており、そのこともあり、小学校入学前というかなり早い段階からサーミとしてのアイデンティティをもっていた。そして、それらは基本的には、ほぼ同時期に経験・意識されている。すなわち、サーミ語を学習する時期とサーミ文化を経験する時期はほぼ同時であることが多く、さらにそうした経験とサーミとしてのアイデンティティを意識する時期はほぼ同時であった。ただし、サーミとしてのアイデンティティの方が早く意識されていた者も存在していた点は忘れてはならない。

この点に関係して、(2) サーミ語能力とサーミとしてのアイデンティティには関連が見られる。具体的には、サーミ語能力の自己評価が高い者ほど、サーミとしてのアイデンティティをつねに意識している。こうした点は言語とアイデンティティの関連の深さを示している。また、先にふれたように、サーミ語やサーミ文化の経験とアイデンティティの自覚はほぼ同時になされることを踏まえると、サーミ語の能力が高いほど、サーミとしてのアイデンティティを常にかけているほど、サーミ文化を多くかつ深く経験していると考えることが妥当だろう。このように見れば、サーミとしての言語・文化・アイデンティティは、同時期に経験・自覚されているだけでなく、その能力や経験のあり方は密接に関連している。

また、(3) サーミ高校の高校生は、今後も引き続きサーミとして積極的に生活したいと考えている者が多かった。そして、こうした傾向は、現在サーミとしてのアイデンティティを持つ者ほど強く感じている。しかし、一定数の者において民族性は意識しないで生活したいと考えていた点にも注目しておいたほうがよい。

加えて、(4) こうした将来、積極的にサーミとして生活したいという意識は、とくに地域生活に関する将来展望と関連していた。具体的には、サーミとして積極的に生活したい者ほどフィンマルク県内での生活を求めている。ここからは、サーミとしてのアイデンティティにおいて、地域での生活が大きな意味をもっていることが示唆される。

ただし、サーミとして積極的に生活したい者は、それ以外の者と同程度に、オスロなどで生活したいとも考えていた点、日常的に主にサーミ語を使用する者は、主にノルウェー語を使用する者と

同程度に、オスロで生活したいと考えていた点にも注目しておく必要があろう。

第2節 サーミ高校教員の教育実践と意識

第1項 本節の課題と調査の概要

本節ではカラショークのサーミ高校の教師に焦点を当て、教職に就いた経緯や教師としての日常生活、教育実践、学校や教育についての意識、生徒の将来についての展望などを見ていく。本節でとりあげるデータは、2013年12月、ノルウェーのカラショークにあるサーミ高校の教員を対象として行われた調査によるものである。調査票は学校の許可を得て教員に配布され、12人から回答を得た。この12人のデータを取り上げるにあたり、本調査の内容が2012年実施のスウェーデンのサーミ学校教員調査とほぼ同一であることから、スウェーデン調査の結果を分析したときの手順に従う(新藤慶 2013)。他にも、カウトケイノの基礎学校の教員調査データ(2013年)をこの手順に従って分析している。そこで、以下においては、必要に応じて、スウェーデンのサーミ学校教員、カウトケイノの基礎学校教員と比較しながら、カラショークのサーミ高校教員の教育実践と意識を探っていくことにしたい。

第2項 サーミ高校教師の労働一生活史

はじめに、調査対象者の基本属性を確認し、教師たちがサーミ高校の教員になるまでの経緯を見ていく(表2-2-1)。性別を見ると、無回答1人を除く11人の内訳は、女性7人、男性4人である。年齢は20歳代から50歳代まで幅広いが、無回答3人を除く9人についてみると、20歳代1人、30歳代1人、40歳代3人、50歳代4人となっており、中高年世代が多い。エスニシティは、無回答1人を除く11人中、サーミが7人、非サーミが4人(ノルウェー人2人、ロシア人1人、その他1人)である。出身国は、ノルウェーが9人、ロシアが1人、その他1人、無回答1人である。自身がサーミであると答えている者について見ると、実父母や父方・母方祖父母の全員あるいは一部がサーミであり、それらの人々の全員あるいは一部がサーミ語を話すなかで育っている。ただし、エスニシティが非サーミであると答える者や無回答の者のなかにも、家族内のサーミをあげる者がいる(B教諭、F教諭、H教諭)。本人のエスニック・アイデンティティとは異なるのかもしれないが、血筋という点からいえば、12人中10人はサーミということができる。

表2-2-1 調査対象者の基本属性

	性別	年齢	エスニシティ	出身国	家族内のサーミ (サーミ語が話せる者には下線)	学歴	サーミ語を 学んだ学校	サーミ文化を 学んだ学校
A教諭	女性	30歳代	サーミ	N	実母、 <u>実父</u> 、 <u>父方祖父母</u> 、 <u>母方祖父母</u>	SUC	小学校、中学校、サーミ高校、サーミ大学	小学校、中学校、サーミ高校、サーミ大学
B教諭	女性	----	非サーミ	----	<u>母方祖父母</u>	大学院	サーミ高校	小学校、中学校、サーミ高校、サーミ大学以外の大学
C教諭	女性	40歳代	サーミ	N	実母、 <u>実父</u> 、 <u>父方祖父母</u> 、 <u>母方祖父母</u>	SUC、大学院	学んだ学校はない	中学校、サーミ高校、サーミ大学
D教諭	男性	40歳代	サーミ	N	<u>実母</u> 、 <u>実父</u>	ユニバーシティ・カレッジ、SUC	小学校	小学校

E 教諭	女性	40 歳代	非サーミ	N	----	ユニバー シティ・ カレッジ	サーミ高校	----
F 教諭	女性	50 歳代	非サーミ	N	夫、子ども、 <u>実父</u>	ユニバー シティ	小学校、中学校、 語学学校	小学校、中学校、 サーミ大学以外 の大学
G 教諭	女性	----	サーミ	N	<u>実母</u> 、 <u>実父</u>	SUC	小学校、中学校、 サーミ高校、サー ミ大学	小学校、中学校、 サーミ高校、サー ミ大学、サーミ大 学以外の大学
H 教諭	----	----	----	N	<u>実母</u> 、 <u>実父</u>	ユニバー シティ・ カレッジ	小学校、中学校	小学校、中学校
I 教諭	男性	50 歳代	サーミ	N	<u>実母</u> 、 <u>実父</u> 、 <u>父方 祖父母</u> 、 <u>母方祖父 母</u>	ユニバー シティ・ カレッジ	サーミ高校	サーミ高校、サー ミ大学
J 教諭	女性	20 歳代	非サーミ	R	夫	ユニバー シティ・ カレッジ	サーミ高校	サーミ高校
K 教諭	男性	50 歳代	サーミ	----	<u>実母</u> 、 <u>実父</u> 、 <u>父方 祖父母</u> 、 <u>母方祖父 母</u>	ユニバー シティ	----	----
L 教諭	男性	50 歳代	サーミ	N	<u>実母</u>	ユニバー シティ	学んだ学校はない	学んだ学校はない

注) 1. 出身国 N= ノルウェー、R= ロシア
2. SUC= サーミ・ユニバーシティ・カレッジ

学歴ではユニバーシティ・カレッジ¹⁷⁾ 卒が最多で7人、そのうち、SUC（サーミ・ユニバーシティ・カレッジ）卒が2人、SUC 以外のユニバーシティ・カレッジ卒が4人である。両方を卒業している者が1人いる。ユニバーシティ卒が3人、大学院修了は2人である。大学院修了者のうち1人はSUCを卒業している。彼らは、サーミ語やサーミ文化を小学校から大学まで様々な教育段階で学んできている。なかには、語学学校やサーミ大学以外の大学で学んだ者もある。上記、サーミ高校の教師のエスニシティ、学歴、サーミ語・サーミ文化の学習経験の3つを基礎学校の教師と比較すると、教師のエスニシティに関してはサーミが圧倒的に多いこと、ユニバーシティ・カレッジ卒が主流であること、様々な教育段階でサーミの言葉と文化を学んできたことにおいては共通している。

次に、家族について見る（表2-2-2）。無回答の1人を除く11人のマリッジステータスは、既婚6人、未婚3人、離死別2人である。パートナーのエスニシティは、サーミが6人、非サーミが5人、無回答が1人である。子どもをもつ者は9人で、この9人に限ると、マリッジステータスは、既婚6人、未婚1人、離死別2人である。子どもに期待する教育水準は、息子・娘の区別なく大学以上であり、大学院レベルの教育を受けさせたいと考える者も5人いる。

ここで、基礎学校の教師と比較するならば、3点あげられよう。1点目は相違点である。基礎学校の教師よりも、サーミ高校の教師の方が自分の子どもに期待する学歴が高い傾向がある。2点目は共通点、地元のサーミ・ユニバーシティ・カレッジに進学させたいと考える者が少ないことである。自身がサーミであり、サーミ高校に勤務しながらも、わが子にはサーミ・ユニバーシティ・カレッジ以外の選択肢を与えたいということである。そして、3点目も共通点である。子どもの性別によって教育期待が異なるケースが1ケース（C教諭）あるが、この教師はトナカイ業を兼業しており、息子より娘により高い学歴を期待している。トナカイ業の後継者となる前提で息子には高学歴は不要と考えられ、一方、娘には、トナカイ業以外の分野で仕事を得るために高い水準の教育が

求められるのである。息子がトナカイ業を担うことへの期待は、スウェーデンのサーミ学校教員のなかにも見られるものである（新藤 2013:111）。ただし、基礎学校においては、「息子には高卒／娘には大学卒」が期待されていたのに対して、サーミ高校においては、「息子には大学卒／娘には大学院卒」が期待されている。サーミ高校の教師の方がより高い水準の教育期待を表明していることは1点目にて指摘されているとおりである。

表2-2-2 家族の状況

	結婚の状況	相手のエスニシティ	何人家族	子どもの有無	子どもへの教育期待
A 教諭	既婚	サーミ	4	有	長女・長女以外の女子：基礎学校→サーミ高校→大学
B 教諭	既婚	非サーミ	3	有	長男・長女：大学院
C 教諭	既婚	サーミ	6	有	長男・長女・長男以外の男子：基礎学校→サーミ高校→サーミ大学以外の大学、長女以外の女子：基礎学校→サーミ高校→サーミ大学以外の大学→大学院
D 教諭	未婚	----	1	無	----
E 教諭	未婚	----	3	有	長男・長男以外の男子：サーミ高校→サーミ大学／サーミ大学以外の大学
F 教諭	既婚	サーミ	3	有	長男・長女：基礎学校→サーミ高校→サーミ大学以外の大学
G 教諭	未婚	----	4	無	----
H 教諭	離死別	非サーミ	1	有	長男・長女・長男以外の男子：サーミ大学以外の大学
I 教諭	既婚	サーミ	5	有	長男：サーミ大学以外の大学、長女：医学生、長女以外の女子：サーミ大学以外の大学
J 教諭	既婚	サーミ	3	有	長男・長男以外の男子・長女・長女以外の女子：PHD 取得
K 教諭	----	----	----	----	----
L 教諭	離死別	サーミ	1	有	長男・長女：大学院

続いて、サーミ高校の教師たちの教職歴を見ていこう（表2-2-3）。所有免許を一覧すると、ノルウェーの教員免許取得者の方が多く、サーミの教員免許取得者（SUC のサーミの教員養成コースで免許を取得した者）が最多とはなっていない。ただし、「ノルウェーの高校で働ける資格」をもつ者8人、「サーミの教員免許」をもつ者5人のなかには、両方の免許をもつ者3人が含まれる。「ノルウェーの高校で働ける資格」と「サーミの教員免許」のいずれももたない者は2人であり、その内訳は、「その他の教育・保育に関する免許・資格（建築関係）」「資格はもっていない」となっている。これらの資格を得たうえでの教師のキャリアを確認すると、12人中11人において、このサーミ高校が初めてのサーミ学校勤務である。ずっと教員を務めてきた者が9人、教員になる前に公務員と自営業を長く務めてきた者が各1、その他1である。現在もトナカイ業を兼業する者が2人（C教諭、G教諭）いる。「教師になった年」「現在の学校に勤務した年」が同じ年である者は5人、教師になって1年でこの学校に着任した者を含めると6人となり、半数がこの学校で教師のキャリアを事実上スタートさせている（B教諭8年、D教諭15年、H教諭1年、I教諭5年、K教諭17年、L教諭31年）。その他の6人について見ると、教師歴は6～24年であるが、サーミ高校歴は1～6年である。基礎学校の教師の場合は7割が現任校で教師生活をスタートさせ、スタートが現任校ではない教師でも着任後15年を超えていた。それに比べると、サーミ高校教師の場合は、サーミ高校で教師キャリアをスタートさせたベテラン40歳代（D教諭）と50歳代（K教諭、L教諭）の他は、サーミ高校でのキャリアは10年に満たない教師ばかりである。自宅からの通勤距離は0.3～6kmであることから、サーミの人々と同じ地域で暮らしながらの教師生活であることはたしかであるが、サーミ

高校教師となってからの年数が基礎学校教師に比べると相対的に短く、地元に基づいた教師集団による教育という点では基礎学校に及ばない。

表 2-2-3 サーミ高校教師になった経緯

	所有免許	教師になった年	初めてサーミ学校に勤務した年	現在の学校に勤務した年	最も長く従事した職業	通勤距離
A 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格 / サーミの教員免許	2004	2009	2009	教員	2
B 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格 / その他の教育・保育に関する免許・資格	2005	2005	2005	教員	3
C 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格 / サーミの教員免許	1992	2008	2008	教員を 20 年以上。家業はトナカイ飼育	6
D 教諭	サーミの教員免許 / その他の教育・保育に関する免許・資格	1997	1997	1998	公務員	2.5
E 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格	1997	2010	2010	教員	4
F 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格	1989	2010	2010	教員	3
G 教諭	サーミの教員免許	2000	2007	2007	教員、トナカイ飼育	3
H 教諭	その他の教育・保育に関する免許・資格（建築関係）	2013	2013	2013	建築関係	0.3
I 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格 / サーミの教員免許	2008	2008	2008	自営業	1
J 教諭	資格はもっていない	2007	2013	2013	教員（幼稚園、小学校、高校においてチューターとして働いてきた）	5
K 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格	1996	1996	1996	教員	2
L 教諭	ノルウェーの高校で働ける資格	1982	1982	1982	教員	2.5

では、そもそも、彼らがサーミ高校の教師となることを選んだ理由とは何だろうか。表 2-2-4 を見ると、最も多いのは「教育に携わりたかったから」6 人、次いで「これまでのキャリアがいかせるから」4 人、3 番目が「人に勧められたから」3 人である。「教育に携わりたかったから」が最多で、「サーミのために働けるから」「サーミ文化に関われるから」を選ぶ者が少数（2 人）である点は基礎学校の教師と変わらない。回答傾向が異なるのは、サーミ高校教師においては、基礎学校のように「金銭的に魅力があったから」をあげる者がおらず、その一方で、基礎学校においては選ばれなかった「これまでのキャリアがいかせるから」という理由をあげる者が一定数いる点である。「教育に携わりたかったから」をあげる者の比率も基礎学校より低いことから、サーミ高校の教師には、基礎学校教師に比べて、専門職としての意識が強い者がより多く含まれていると見ることができるだろう。サーミ学校の教師であるにもかかわらず、「サーミのために働けるから」「サーミ文化に関われるから」というサーミへの思いを理由としてあげる者が少ないことを、サーミへの心情的な近さや親しみよりも教師としてのキャリアを重視する姿勢と見るか、あるいは、サーミへの思いは当然のものとしてあるが、教員を選択した理由としてサーミ寄りの心情をあげることには抵抗があると見るか。これについては判断に迷うところである。ただ、表 2-2-1 において、明らかにサーミの血筋であっても、サーミとしてのエスニック・アイデンティティが表明されない例があったように、サーミと自分の距離や距離感を表明することについては、複雑な感情や選択的な意志が働いていることも推察される。スウェーデンのサーミ学校の教師とはその点異なっているといえる。

さて、彼らの年間世帯収入をみると、30～40万NOKを下回る者はおらず、収入の分布の幅は基礎学校教員の場合と変わらない。そのなかで、80万NOK以上の収入を得ているのは4人（A教諭、F教諭、I教諭、K教諭）である。30歳代が1人、50歳代が3人、ノルウェーの高校で働ける資格とサーミの教員免許の両方、あるいは、ノルウェーの高校で働ける資格のみをもち、サーミ高校での勤続年数は3～17年である。収入のランクを年齢や勤続年数だけで説明することは難しいが、ノルウェーの高校で働ける免許を有していない4人（D教諭、G教諭、H教諭、J教諭）についてみると、一人を除いては収入が30～50万NOKにとどまることから、サーミ高校教師の基礎的な資格としては、まず、ノルウェーの高校で働ける資格が重視されていると考えることができる。

表2-2-4 サーミ高校教師を選んだ理由と収入

	サーミ高校教師を選んだ理由	年間世帯収入
A教諭	教育に携わりたかったから	80万NOK以上
B教諭	その他	70～80万NOK未満
C教諭	教育に携わりたかったから / サーミ文化に関われるから / サーミのために働けるから	60～70万NOK未満
D教諭	人に勧められたから / これまでのキャリアがいかせるから / サーミ文化に関われるから / サーミのために働けるから	40～50万NOK未満
E教諭	教育に携わりたかったから	50～60万NOK未満
F教諭	教育に携わりたかったから / 人に勧められたから	80万NOK以上
G教諭	これまでのキャリアがいかせるから	70～80万NOK未満
H教諭	これまでのキャリアがいかせるから	40～50万NOK未満
I教諭	これまでのキャリアがいかせるから	80万NOK以上
J教諭	人に勧められたから	30～40万NOK未満
K教諭	教育に携わりたかったから	80万NOK以上
L教諭	教育に携わりたかったから	50～60万NOK未満

第3項 基本的な教育スタイル

次いで、サーミ高校の基本的な教育スタイルを確認する。勤務時間はおおよそ8時半から15時半である（表2-2-5）。勤務時間は基礎学校よりやや長く、教員間のばらつきはやや少ない。担当学年は1～3年である。生徒と接するときにはとサーミ語とノルウェー語が併用されている。ノルウェー語と他の言語（英語）（B教諭）、サーミ語だけ（G教諭）、ノルウェー語だけ（L教諭）の3人については、語学科目を担当する教員として、学内では自分が教えている言語を主に使用しているということも考えられるが、彼らを除く9人はすべてこの2つの言語を併用して教育をおこなっている（表2-2-6）。その際、注目すべきは、併用のあり方が必ずしもサーミ語中心ではないことである。「サーミ語、ノルウェー語」という回答（2人）から両言語の使用頻度の割合を知ることはできないが、「サーミ語と少しのノルウェー語」（3人）、「ノルウェー語と少しのサーミ語」（4人）がほぼ同数であることから、少なくとも、サーミ語中心の教育体制ではないことが推察される。基礎学校においてはサーミ語が主でノルウェー語が従であったこととは対照的である。この違いには、ひとつには教師のサーミ語能力の問題、もうひとつには基礎学校と高校という教育段階の違いが大きく関わっていると思われる。

表 2-2-5 勤務時間と担当学年

	平均的な勤務時間	担当学年
A 教諭	8:30 - 15:30	1～3 年
B 教諭	8:30 - 15:35	1 年、3 年
C 教諭	8:30 - 15:30	1 年、2 年
D 教諭	8:30 - 15:35	1～3 年
E 教諭	8:30 - 15:30	2 年
F 教諭	週に 42 時間	1～2 年
G 教諭	8:30 - 15:30	1～3 年
H 教諭	9:30 - 15:30	2 年
I 教諭	8:30 - 13:00	2 年
J 教諭	8:30 - 15:35	1 年、3 年
K 教諭	8:00 - 15:30	2 年、3 年
L 教諭	8:30 - 15:30	1 年、2 年

表 2-2-6 教育実践とサーミ語

	生徒と接するときに使用する言語	担当科目
A 教諭	サーミ語と少しのノルウェー語	サーミ語、体育
B 教諭	ノルウェー語、英語	英語、歴史、社会科学
C 教諭	サーミ語、サーミ語と少しのノルウェー語	サーミ語、特別支援
D 教諭	サーミ語と少しのノルウェー語	進学コース、職業教育コース
E 教諭	ノルウェー語と少しのサーミ語、手話	ノルウェー語、歴史、手話
F 教諭	ノルウェー語と少しのサーミ語、英語	英語、宗教
G 教諭	サーミ語	サーミ語
H 教諭	サーミ語、ノルウェー語	建築技術
I 教諭	サーミ語、ノルウェー語と少しのサーミ語、ノルウェー	救急学、救急医療
J 教諭	ノルウェー語と少しのサーミ語	科学、数学、化学、物理学
K 教諭	サーミ語、ノルウェー語	歴史、職業教育
L 教諭	ノルウェー語	ノルウェー語、地理学、社会科学、音楽

まず、教師のサーミ語能力についてみる。無回答の 1 人を除く 11 人全員が北サーミ語を使うことができると回答しているが、その能力の程度は多様であり、話す・読む・聞く・書く、のすべてについて最も高い水準の能力があると答えているのは 5 人のみである（表 2-2-7）。基礎学校の教師に比較すると、サーミ高校の教師のサーミ語能力の水準は明らかに低いといってよい。サーミ語を「すでに習っている」者や、「習いたい」とする者がいることから、サーミ語の能力を向上させることに関心をもたれていないわけではないが、現時点でのサーミ語能力としては教師全員が不自由なくサーミ語を操る教育環境ではないことがわかる。

もうひとつの理由としては、高校の場合、就職や高等教育への進学を見すえて、サーミ社会とノルウェー社会の両方への接続を可能にする内容の教育をすることが志向されていることが考えられる。教師たちの担当科目を見ても、基礎学校に比較すると科目は多様であり、科目名に「サーミ」という語が含まれる科目はサーミ語のみである。教師のサーミ語能力が基礎学校に比較すると低い水準であるということは、授業においてサーミ語が必要とされる場面が少ないために、そもそも高い水準のサーミ語能力が求められていない、あるいは、サーミ語能力よりも教科教育の能力の方がより重視された結果、ということもあり得る。基礎学校教師の場合は、担当する生徒の年齢が低い

ため、おそらくサーミ語でなければ指導が成立しない場面が多く、そのことが教師のサーミ語能力の高さを必要としていたと思われる。また、スウェーデンのサーミ学校教師のサーミ語能力が高いのも、生徒の年齢が4年生より下であったからだと考えられる。教師のサーミ語能力を評価するときには、教育実践におけるサーミ語の出番が教育段階によって異なるであろうことも考え合わせることが必要である。

表2-2-7 サーミ高校教師のサーミ語能力

	自分が使える サーミ語	最も得意なサーミ語の能力				サーミ語の学習意志
		話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと	
A 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取り などがわかる	どんな文書で も書ける	十分なサーミ語能力があ るので習う必要はない
B 教諭	北サーミ語	かなり話せる	本が読める	日常生活の話題 がわかる	簡単なメモが 書ける	すでに習っている
C 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取り などがわかる *「日常生活の 話題がわかる」 も選択	どんな文書で も書ける	わからない
D 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取り などがわかる	どんな文書で も書ける	十分なサーミ語能力があ るので習う必要はない
E 教諭	北サーミ語	簡単な内容な ら話せる	簡単な雑誌 が読める	日常生活の話題 がわかる	簡単なメモが 書ける	習いたい
F 教諭	北サーミ語	簡単な内容な ら話せる	簡単な雑誌 が読める	議会のやり取り などがわかる	簡単なメモが 書ける	習いたい
G 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取り などがわかる	どんな文書で も書ける	十分なサーミ語能力があ るので習う必要はない
H 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	簡単な雑誌 が読める	議会のやり取り などがわかる	簡単なメモが 書ける	十分なサーミ語能力があ るので習う必要はない
I 教諭	北サーミ語	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取り などがわかる	どんな文書で も書ける	----
J 教諭	北サーミ語	簡単な内容な ら話せる	簡単な雑誌 が読める	基本的なことな らわかる	簡単なメモが 書ける	すでに習っている
K 教諭	----	----	----	----	----	----
L 教諭	北サーミ語	簡単な内容な ら話せる	簡単な雑誌 が読める	基本的なことな らわかる	文字が書ける	わからない

第4項 サーミ高校に対する意識

それでは、サーミ高校を教師たちはどのように評価しているのだろうか（表2-2-8）。無回答を除いた回答傾向を見ていこう。まず、サーミ高校の何についてメリットを認めているのかを見る。「専門的な知識や技術が得られる」「サーミ語を身につけられる」「サーミ語で学ぶので理解しやすい」「サーミ文化を身につけられる」「サーミの友人ができる」「進学に有利である」「就職に有利である」の7項目のうち、全員が支持するのは「専門的な知識や技術が得られる」「サーミの友人ができる」である。その他の5項目については、「あまりそう思わない」「そう思わない」を選択する者が1人あるいは2人おり、その他の者はメリットがあるとの認識である。「進学に有利である」「就職に有利である」の2項目について、全員一致で賛成とならないのは基礎学校と同じであるが、否定的な者の比率は基礎学校より低い。このように、サーミ高校の教育実践に関しては、授業内容についても、サーミとしての学びについても、生徒の交友関係についても、おおむね肯定的な評価がなされているといってよい。

このサーミ高校への肯定的な評価は、「サーミ高校の一番すばらしいところ」を問うた際の回答にも表れている。回答している 11 人全員が、生徒がサーミ語とサーミ文化を学び、サーミとしてのアイデンティティを獲得していく機会を提供する場としてのサーミ高校の価値を認めている。また、ノルウェー語を母語とする者がサーミ語を学ぶ機会を提供していることもサーミ高校のすばらしいところとしてあげられている。「サーミの価値観をもつサーミの環境で教育を受け、授業でサーミ語を身につけることができること」(A 教諭)、「生徒が自身のサーミバックグラウンドについて学び、サーミ・アイデンティティが強くなる機会をもつこと」(B 教諭)、「第一言語を使う機会を得る。サーミの歴史や文化を学べる。ノルウェー語を母語とする者はサーミ語を学ぶチャンスが得られる」(G 教諭)、「サーミ学校はサーミ語とサーミ文化を守っている」(L 教諭)といった記述がある。

表 2-2-8 サーミ高校に対する評価

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
A. 専門的な知識や技術が得られる	2	1	2	2	2	2	1	1	2	1	1	2
B. サーミ語を身につけられる	1	1	1	1	1	1	1	3	2	1	1	1
C. サーミ語で学ぶので理解しやすい	2	4	1	1	2	1	1	2	2	3	1	2
D. サーミ文化を身につけられる	2	1	1	1	1	1	1	4	2	1	1	1
E. サーミの友人ができる	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1
F. サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる	4	2	2	4	4	4	3	—	4	4	4	4
G. ノルウェー語が覚えられない	4	4	1	3	4	4	4	—	4	3	4	4
H. ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない	4	4	3	3	4	4	4	—	4	3	4	4
I. 教育設備が整っている	1	1	1	1	2	1	1	—	1	1	1	2
J. サーミ語の教材が整っている	3	4	2	3	4	4	4	—	4	2	1	4
K. 進学に有利である	1	2	1	3	2	2	1	—	2	1	1	2
L. 就職に有利である	1	2	2	1	2	2	1	—	2	2	1	3
M. もっと公的財政支援を増やすべき	2	3	1	1	1	2	1	—	1	2	1	1
N. サーミ語の授業を増やすべき	4	4	2	1	1	2	1	—	1	3	1	1
O. サーミ文化の授業を増やすべき	1	2	1	1	2	2	1	—	1	2	1	2

注) 1=そう思う、2=ややそう思う、3=あまりそう思わない、4=そう思わない

表 2-2-8 に戻り、メリットとしての「サーミ語で学ぶので理解しやすい」について、「そう思わない」と答える B 教諭と、「あまりそう思わない」と答える J 教諭、両者の言い分を見てみよう。2つのことが考えられる。ひとつは、B 教諭の担当科目のひとつが英語であり、英語の有用さを強く意識している可能性があること、J 教諭の担当科目が理科系の科目（科学、数学、化学、物理学）であり、サーミ語で教えることが難しいと認識されていることである。J 教諭の認識については、基礎学校の教師において、サーミ語で数学を教えることの困難さが指摘されていたことから、高校段階においても同様の状況が考えられる。もうひとつは、この 2 人の教師は自身のサーミ語能力が十分ではないとの認識をもち、現在サーミ語を習っている最中であることから(表 2-2-7)、サーミ高校への評価というよりは、自身の語学力不足という意味で否定的な回答をしているとも考えられることである。

次に、サーミ高校の何がデメリットだととらえられているのかを見る。「サーミ以外の友だちとの関わりが少なくなる」「ノルウェー語が覚えられない」「ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない」の 3 項目のうち、「ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない」という見方については全員が反対の立場である。他の 2 項目についても大半は否定的である。これは、サーミ語やサーミ文

化の重視が生徒の社会関係や文化的生活にデメリットを与えることはない、という考えの表明である点は基礎学校と同様であるが、加えて、サーミ高校の教師においては、ノルウェー社会に接続するための教育をしているという自負があると思われる。

教育環境の現状については、「教育設備が整っている」「サーミ語の教材が整っている」の2項目が提示されたが、回答傾向は異なっている。前者については賛成する者が多いが、後者については意見が分かれている。科目によってはサーミ語の教材が整っているとはいえない状況と評価されていると考えられる。また、この学校の今後に関する「もっと公的財政支援を増やすべき」「サーミ語の授業を増やすべき」「サーミ文化の授業を増やすべき」の3項目について問うたところ、「サーミ文化の授業を増やすべき」については全員が賛成する一方で、「もっと公的財政支援を増やすべき」「サーミ語の授業を増やすべき」についての評価は一致しないという結果である。とくに、「サーミ語の授業を増やすべき」という項目については、「そう思う」から「そう思わない」まで回答は多様である。サーミ文化とサーミ語へのスタンスの違いが際立つ点が注目される。基礎学校教師においても、どちらかといえば、サーミ語よりサーミ文化の授業増を必要と考える傾向が見られたが、サーミ語の授業増について否定的な教師はサーミ高校の方にはしか見られない。A教諭とB教諭は語学、J教諭は理科系の科目を教えるなかで、サーミ語に傾斜することのデメリットを感じるようになっていったのではないのか。

ここで、サーミ高校の生徒がサーミ語で学習することやサーミ語を学ぶことについて、教師たちがどのように考えているのかをあらためて確認しておこう（表2-2-9）。上で見たように、全体としては、サーミ高校の現行の教育を肯定する意見が多数を占めており、否定的な意見は少数である。しかしながら、サーミ語による教育の是非に焦点をあわせた質問をすると、その回答のばらつきはさらに明確な形で表れる。まず、「理系科目の学習はサーミ語よりノルウェー語の方がよい」との意見は、実際に当該科目を担当している教師において強く意識されている。「そう思う」と答えるI教諭の担当は、救急学、救急医療、J教諭の担当は、上で見た通り、科学、数学、化学、物理学である。また、生徒の将来に関わって、サーミエリア以外の地域での生活についてはそれほど心配されていないが、「サーミエリア以外の地域へ進学する際には不利になる」と思う者は6人、不利とは思わない者は5人、「サーミエリア以外の地域で就職する際には不利になる」と思う者は3人、不利とは思わない者は8人となっており、高校卒業後の近い将来である進学と就職に関してはサーミ語教育への懸念をもつ者が少なからずいる事実が明らかとなった。表2-2-8で見たように、サーミ高校で学ぶことのメリットとして「進学に有利である」「就職に有利である」の2項目について問うた場合は、おそらく、サーミ社会におけるサーミ高校の「特権的な位置づけ」ゆえに、むしろ有利さが意識され、結果として否定的回答は各1人となったと考えられる。しかし、サーミ社会の外に出ていくことを前提にサーミ語教育の是非が問われると、サーミ語での教育がむしろデメリットとなる可能性がクローズアップされてしまうのではないのか。「サーミ語の授業を増やすべき」という項目について否定的な者がいたことはすでに見たとおりである。サーミ高校の生徒たちが、「サーミ社会で生きていく力を身につけること」と、「サーミ社会以外でも生きていく力を身につけること」を両立するためには、いかなる教育が必要なのか。教師として、自信と迷いの両方を抱えながらの教育実践を行っている状況であることがわかる。

表2-2-9 サーミ高校の生徒がサーミ語で学習することやサーミ語を学ぶことに対する評価

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
A. 理系科目の学習はサーミ語よりもノルウェー語の方がよい	3	2	3	3	2	4	2	-	1	1	4	4
B. サーミエリア以外への地域へ進学する際には不利になる	4	2	4	3	2	4	2	-	2	2	1	4
C. サーミエリア以外の地域で就職する際には不利になる	4	3	4	3	3	4	4	-	2	2	1	3
D. サーミエリア以外の地域で生活する際には不利になる	4	3	4	3	4	4	4	-	2	3	1	4

注) 1=そう思う、2=ややそう思う、3=あまりそう思わない、4=そう思わない

第5項 保護者との関わり

ここで、教師と保護者の関わり方を見ておく。教師が保護者から相談を受ける機会は、回答している11人のうち「あまりない」が7人、「たまにある」が4人である（表2-2-10）。基礎学校においては「たまにある」という回答が7割以上であったことと比較するとかなり少ないという印象である。しかし、これは保護者の関心が低いということではなく、ここが高校段階の学校であり、基礎学校の保護者とは子どもの学校への関わり方が変わってくるためではないだろうか。このように考えられるのは、基礎学校の教師と比較すると、保護者の関わりを求める姿勢が共有されているとはいいがたいからである（表2-2-11）。すなわち、保護者に対する評価として提示された5つの項目についての回答を見ると、「子どもの教育に関して話しあう機会がほしい」「家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい」「子どもを学校に任せきりにしないでほしい」「保護者同士がもっと互いに関わりあってほしい」の4項目については多くが肯定的な回答を寄せるなかで、否定的な回答をする者の比率は基礎学校よりも高めという結果である。さらに、「学校の行事にもっと参加してほしい」については11人中7人が否定的である。

表2-2-10 保護者からの相談

	相談を受けること	相談の内容
A 教諭	あまりない	----
B 教諭	たまにある	家庭での学習指導について / 子どもの進路について
C 教諭	あまりない	----
D 教諭	あまりない	----
E 教諭	あまりない	----
F 教諭	たまにある	サーミ高校の教育内容について / 子どもの進路について
G 教諭	たまにある	サーミ高校の教育内容について
H 教諭	----	----
I 教諭	あまりない	----
J 教諭	あまりない	----
K 教諭	たまにある	家庭での学習指導について
L 教諭	あまりない	----

表2-2-11 保護者に対する評価

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
A. 子どもの教育に関して話しあう機会がほしい	4	1	2	2	1	1	2	-	1	1	1	2
B. 学校の行事にもっと参加してほしい	4	3	3	3	2	2	3	-	1	2	4	3
C. 家庭学習にもっと真剣に取り組んでほしい	1	2	3	3	2	2	2	-	1	1	2	-
D. 子どもを学校に任せきりにしないでほしい	2	1	2	3	1	4	1	-	1	1	1	4
E. 保護者同士がもっと互いに関わりあってほしい	2	2	2	2	2	3	2	-	1	2	2	3

注) 1=そう思う、2=ややそう思う、3=あまりそう思わない、4=そう思わない

このように、保護者から相談を受けることもあまりない状況において、保護者に対しては、より積極的に学校に関わろうとする態勢を求める教師が多くいることはたしかである。しかしながら、個人によって保護者への評価は多様であり、保護者と学校との連携のあり方についての教員間の考え方には大きな開きがあることが指摘される。

第6項 サーミ高校の今後と生徒の将来

ここまで、サーミ高校での教育スタイル、サーミ高校のメリット・デメリットに関する考え方、サーミ高校への保護者の関わりに対する評価を見てきた。では、これらの教師たちは、サーミ高校の今後と生徒の将来についてどのように考えているのだろうか。まず、サーミ高校の数について問うた結果をみると、11人中「現状でよい」が7人、「増やすべき」が4人である（表2-2-12）。「減らすべき」と回答する者はおらず、少なくとも、サーミ高校の存在意義については異論ないというところだろう。もっとも、これらの回答の理由としてあげられている諸点を見ると、そこにはやはり多様な考えをうかがうことができる。数については「現状でよい」と回答する者がサーミへの関心が薄いということでは必ずしもなく、現存の学校を拡充して、よりよい教育体制を整える提案もなされている。たとえば、「サーミ高校の数は現状のままでよいが、そのうちの1つあるいはいくつかを拡充して資料センターとし、より深く学べるようにすべきだ」（E教諭）、「北サーミ語で教育している2校を維持すればよいが、そのうちの1つでは、ルレ・サーミ語と南サーミ語でも教育が行われるとよいのではないか」（F教諭）といった発言がある。

表2-2-12 サーミ高校の今後のあり方

	今後のあり方	その理由
A教諭	現状でよい	----
B教諭	現状でよい	サーミの人口はそれほど多くはない
C教諭	増やすべき	サーミエリア以外でもサーミ高校で学ぶ機会を保障できるように
D教諭	増やすべき	----
E教諭	現状でよい	サーミ高校の数は現状のままでよいが、そのうちの1つあるいはいくつかを拡充して資料センターとし、より深く学べるようにすべきだ
F教諭	現状でよい	北サーミ語で教育している2校を維持すればよいが、そのうちのひとつでは、ルレ・サーミ語と南サーミ語でも教育が行われるとよいのではないかと
G教諭	増やすべき	トロンハイムとオスロにサーミ高校を置くべき
H教諭	----	----
I教諭	現状でよい	----
J教諭	現状でよい	サーミの人口に見合うだけの数の学校はある。しかし、サーミ高校を選択する人が増えたら、学校を増やさなければならない
K教諭	増やすべき	サーミの若者は受けられる教育もまだ十分に受けていない
L教諭	現状でよい	----

このように、サーミ高校の数に関しては現状維持と増加、ふたつの意見に分かれ、その理由も多様である。しかし、この学校に「もっと公的財政支援を増やすべき」という点について賛成する者が多いことはすでにみたとおりであり（表2-2-8）、少なくとも、現任校であるこのサーミ高校をさらに充実させたいという気持ちはおおむね共有されているといえる。

さて、サーミ高校の今後をめぐるこれらの考え方は、サーミ高校の生徒の将来への思いに大きく左右されることが予想される。彼らは、生徒に対して、「サーミであること」をどのように受けと

めて生きてほしいと考えているのだろうか。表2-2-13によれば、回答している11人のうち、「サーミとして積極的に生活してほしい」と答える者が9人、「その他」と答える者が2人である。この結果だけを見るなら、教師の大半は、生徒がサーミとして生きていくことを積極的に支援する姿勢であるといえる。基礎学校の教師においても、「サーミとして積極的に生活してほしい」と答える者の方が圧倒的に多く、この点は共通する。

表2-2-13 生徒の将来の生活についての期待

A 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
B 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
C 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
D 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
E 教諭	その他（サーミ文化とノルウェー文化からそれぞれ一番いいところを受け取ってアクティブに暮らしてほしい）
F 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
G 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
H 教諭	----
I 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
J 教諭	その他（自分で選ばなければならない。サーミのアイデンティティを守ることを自ら選ぼうと望むのだったらすばらしいことだ）
K 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい
L 教諭	サーミとして積極的に生活してほしい

しかし、だとするなら、上で見てきた諸点、すなわち、サーミ高校の授業で使用される言語は必ずしもサーミ語中心ではないこと（表2-2-6）、「サーミ文化の授業を増やすべき」については全員が賛成する一方で、「サーミ語の授業を増やすべき」については意見が分かれること（表2-2-8）、サーミエリア以外の地域への進学や、サーミエリア以外の地域での就職についてはサーミ語教育への懸念をもつ者が少なからずいること（表2-2-9）はどのように説明されるのだろうか。

サーミとして積極的に生活することは、サーミ社会のなかで生活することと同義ではない。生活の場がサーミ社会であっても、サーミ社会以外であっても、サーミとして積極的に生活することが重要なのである。が、積極的な生活のあり方は社会によって異なる。だからこそ、生活の場としてどちらを選んでも、サーミとして積極的に生活する力を身につけさせるには、サーミ語ばかりにこだわらない教育が必要と考えられているということだろう。基礎学校の場合、教師が子どもに求めるのは、自身の基盤をつくるために、サーミ語とサーミ文化をしっかりと学ぶことであった。しかしながら、高校の場合は、サーミ社会の外で生きていくかもしれない生徒の将来を具体的に想定しながら教育をしなければならない。したがって、高校の教師は、ノルウェー社会への接続も考えながら教育をする。教師たちが、自分の子どもにはサーミ大学以外の大学に進学させたいと考える（表2-2-2）こともそのひとつの現れといえるだろう。

第7項 教師の日常生活とサーミとしての意識

以上、サーミ高校教師の教育実践と教育に関する考え方を見てきた。最後に、教師自身の日常生活とサーミとしての意識を取り上げる。まず、現在の生活についてはおおむね満足しているといえる。「どちらかといえば不満」あるいは「不満」と答えている者はいない。満足の度合いは、仕事内容、

収入、地域の環境、生活全般のすべてにおいてそれほど変わらないが、収入よりも仕事内容、仕事内容よりも地域の環境と生活全般の満足度がやや高い（表 2 - 2 - 14）。日常の交流相手はサーミである場合が多く、11 人中「サーミの人々とのつきあいが多い」と回答する者 6 人、「サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている」と回答する者 3 人、「つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない」と回答する者 2 人である（表 2 - 2 - 15）。

表 2 - 2 - 14 現在の生活についての満足度

	仕事内容	収 入	地域の環境	生活全般
A 教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
B 教諭	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
C 教諭	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
D 教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
E 教諭	満足	満足	満足	どちらかといえば満足
F 教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
G 教諭	どちらかといえば満足	満足	満足	満足
H 教諭	どちらかといえば満足	満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足
I 教諭	満足	満足	満足	満足
J 教諭	満足	どちらかといえば満足	満足	満足
K 教諭	満足	満足	満足	満足
L 教諭	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	満足

表 2 - 2 - 15 日常の交流

	日常の交流
A 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
B 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
C 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
D 教諭	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている
E 教諭	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない
F 教諭	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている
G 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
H 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
I 教諭	サーミの人々とのつきあいが多い
J 教諭	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている
K 教諭	----
L 教諭	つきあううえで、サーミかサーミでないかは意識していない

では、そのような日常生活を送りながらの教師生活によって、自身がサーミである教師の「サーミとしての意識」は変わるのだろうか。サーミ高校の教師を務めることで、サーミとしての自覚は「特に変わらない」とする者が半数であるが、「サーミであることを誇りに思うことが増えた」という者が 2 人おり、少なくとも、サーミとしての自覚が弱まったり、サーミであることをマイナスに思ったりすることが増えるということはない（表 2 - 2 - 16）。また、将来の生活については、サーミとしてのエスニック・アイデンティティを表明する者のほとんどが「サーミとして積極的に生活していきたい」と答えている。

表2-2-16 【サーミの先生】サーミとしての意識

	サーミとしての自覚	将来の生活についての考え方
A 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい。サーミの子どもや若者に対して、彼らが自分のサーミとしてのバックグラウンドを誇りにすべきであることを示したい
B 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい
C 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい
D 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい
E 教諭	----	----
F 教諭	----	----
G 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい
H 教諭	----	----
I 教諭	サーミであることを誇りに思うことが増えた	サーミとして積極的に生活していきたい
J 教諭	サーミであることを誇りに思うことが増えた	----
K 教諭	とくに変わらない	サーミとして積極的に生活していきたい
L 教諭	----	とくに民族は意識せず生活していきたい

第8項 小括

以上、カラショークのサーミ高校の教師を取り上げ、教育実践と教育にまつわる意識、教師自身の生活やサーミとしての意識など様々な側面から考察してきた。スウェーデンのサーミ学校教師、ノルウェー・カウトケイノの基礎学校教師への調査から得られた知見を参照しながら、調査結果を整理する。

第1に、サーミ高校でのキャリアは、この高校で教師生活をスタートさせたベテラン2人の他は、10年に満たない教師ばかりである。現任校での勤務年数がスウェーデンのサーミ学校教師やカウトケイノの基礎学校教師に比べると相対的に短く、地元根づいた教師集団による教育という点では両校に及ばない。しかし、教師たちは、授業内容、サーミとしての学び、生徒の交友関係などサーミ高校の教育実践については概ねうまくいっていると肯定的にとらえており、サーミ高校がサーミ社会において特別の存在であるとの自負をもっている。

第2に、教師はいずれもサーミ語能力をもつものの、運用能力は多様であり、なかにはサーミ語を得意としない教師も存在する。また、使用可能とされるサーミ語は、スウェーデンのサーミ学校教師、カウトケイノの基礎学校教師と同様に、北サーミ語である。ルレ・サーミ語や南サーミ語が使える教師はいない。ただし、授業ではサーミ語とノルウェー語の併用が主流であり、サーミ語が得意でなくても教師を務めることはできている。授業がサーミ語中心であるスウェーデンのサーミ学校、カウトケイノの基礎学校とはこの点で異なっている。その理由としては、サーミ高校は大学進学や就職を視野に入れた教育段階であり、サーミ社会とサーミ以外の社会の両方への接続を可能とする教育内容が求められることがあげられる。スウェーデンのサーミ学校、カウトケイノの基礎学校の教師が担当するのはそれより下の年齢の子どもであり、その子どもたちにサーミとしての基礎的なことを身につけさせるために、サーミ語とサーミ文化をきちんと学ばせることが重視され、それらの授業増が求められていた。それに対して、サーミ高校では、サーミ語授業増に否定的な教員さえいる。教育に用いられる言語の選択は教育段階によって異なることがわかる。

第3に、このようなサーミ高校の教師は、スウェーデンのサーミ学校教師、カウトケイノの基礎学校教師と同じく、高等教育を受けて教師となり、安定した収入を得ている。しかし、サーミ高校

であるにもかかわらず、職業選択の理由として「サーミのため」をあげる者はわずかであり、一方で、専門職としての自身のキャリア形成に関心をもつ者が見られる。このことをもって、サーミ高校の教師がサーミ社会に対して冷淡であると解釈することも可能だが、自身がサーミである教師自身「サーミとして積極的に生活していきたい」と述べており、サーミへの関心が薄いということではない。逆に、だからこそ、彼らは、サーミ社会に埋没することなく、サーミ社会を客観的に見ることができる立場に身を置いていると考えることもできる。そのことを示すように、基礎学校の教師のなかにはサーミ社会にしか目を向けていないように見受けられる者がいたが、サーミ高校の教師は、「サーミ社会で生きていく力を身につけること」と、「サーミ社会以外でも生きていく力を身につけること」を両立するための教育実践を探っている。生徒に多様な選択肢のための準備をさせようとしているのである。

第4に、サーミ高校の教師は、生徒に対して「サーミとして積極的に生活してほしい」と望んでいる。スウェーデンのサーミ学校、カウトケイノの基礎学校と同様に、サーミの生徒を抱える学校としては、サーミ語やサーミ文化を習得させ、サーミとしてのアイデンティティを涵養するような教育をすること、多様な将来に対応していけるような教育内容としていくこと、の2点が重要となってくるだろう。

おわりに

以上、サーミ高校を対象に、そこに通う高校生とそこで働く教員の生活と意識を明らかにしてきた。最後に、得られた知見をもとに、彼らにとってサーミ高校がどのような意味をもっているのか考察し、そこからサーミ高校における教育の現状を浮き彫りにしよう。

まず、サーミ高校に通う高校生は、多くの場合、小学校入学前というかなり早い段階からサーミ語やサーミ文化に触れ、さらにサーミとしてのアイデンティティを自覚していた。そして、彼らは、サーミ高校に対して、サーミ語やサーミ文化の習得に関してかなり高い評価を与えていた。

こうした点をふまえれば、第1に、サーミ高校は、彼らにとって、サーミ語やサーミ文化をさらに学習・経験させることを通して、サーミとしてのアイデンティティをより一層強くさせる場としての意味をもっていることがわかる。その点において、サーミ高校は、サーミ社会の担い手を形成している。

ここで、さらに注目すべきは、サーミ語を経験する時期が遅かった者に対しても、サーミ語を習得させていると解釈できた点である。それゆえ、この点を踏まえれば、第2に、サーミ高校は、サーミ社会にあまり慣れ親しんでいなかった者に対して、サーミ語やサーミ文化を習得する機会を提供し、さらにはサーミとしてのアイデンティティの形成を促すという意味をもっている。

こうした点は、いうまでもなく、サーミ高校の教員の教育実践によって維持されていよう。実際、上記のような点を、「サーミ高校の一番すばらしいところ」として、多くの教員が評価していたのであった。

他方で、サーミ高校に通う高校生の多くが、将来、積極的にサーミとして生活したいとも考えていた。そして、そうした意識は、特に居住する地域と関連していた。すなわち、将来、サーミとして積極的に生活したいと考えている者ほど、カラショークなどのフィンマルク県内で生活したいと考えていた。

ここからは、第3に、サーミ高校は、高校生がもつサーミとしてのアイデンティティを単に強めているのではなく、サーミ集住地での生活を求めるような形でそのアイデンティティを強めていると判断できる。その点において、サーミ高校は、サーミ集住地という地域的なレベルにおけるサーミ社会の担い手も形成している。

しかし、同時に注目しなければならないのは、サーミとして積極的に生活したい者の一部は、そうした意識を持たない者とほぼ同程度にオスロに代表されるようなサーミ集住地以外の地域で生活したいと考えていたことである。こうしたサーミ集住地以外の地域での生活を求める者は、日常生活で主にサーミ語を使う者においても見られた。そして、そうした傾向は、日常的にノルウェー語を用いる者と同程度にあると判断できた。

この点を踏まえれば、第4に、サーミ高校は、サーミ集住地以外での生活に適応できるような力を高校生に付与していると考えられることもできる。その点において、サーミ高校は、そこに通う高校生がノルウェー社会と関わりをもつことを促している。

もちろん、こうした点は、サーミ高校の教育実践によって支えられている。実際、サーミ高校での授業は、サーミ語だけではなく、ノルウェー語によってもなされていたのであった。そして、サーミ高校に通う高校生の多くは、サーミ集住地で就職や生活をする際に不利になるとは考えていなかった。

以上のように見れば、サーミ高校は、一方で、サーミ集住地での生活を求める者を形成し地域レベルにおけるサーミ社会の担い手を形成すると同時に、他方で、サーミ集住地以外での生活を求める者も形成することでサーミ高校に通う高校生のノルウェー社会への関わりを促すという意味をもっている。

ただし、サーミ高校に通う高校生においては、サーミ集住地以外の地域へ進学することに関して、評価が二分されていた。加えて、その点については、サーミ高校の教員においても評価が二分されていた。これらの点は、サーミ高校が、サーミ集住地以外の地域にある大学への準備を必ずしも十分に提供できていない可能性を示唆する。その点において、ノルウェー社会への接続という点に関しては、今後さらに教育実践上の課題が存在している可能性がある。

さらに、サーミ高校に通う高校生においては、サーミの伝統と関連深い学部があるサーミ・ユニバーシティ・カレッジへの進学を考えている者はいなかった。その点において、サーミ社会の担い手の形成には至っていない。こうした背景には、一方で、サーミ高校での教育を通じて、サーミ高校に通う高校生が、サーミ語やサーミ文化、さらにサーミとしてのアイデンティティを十分なほどに形成した結果として進学を希望しないという可能性が考えられるだけでなく、他方で、サーミ高校での教育は、より専門的にサーミ語やサーミ文化を学習する意欲を形成することには至っていないという可能性も考えることができる¹⁸⁾。今後、さらなる検討が必要かもしれない。

加えて、とくにサーミ集住地以外での生活を求める者の形成は、品川（2013）が指摘するように、優秀な人材の流出という側面が伴っている可能性が高い。その点を踏まえると、サーミ高校は、集住地という地域レベルのサーミ社会の担い手の形成という点においては、教育機関として取り組むべき課題が存在している可能性が示唆される。

とはいえいずれにせよ、サーミ高校は、基本的には、サーミ高校に通う高校生に対して、サーミ社会での生活を促すこととノルウェー社会への関わりを促すことという2つの課題を同時に果たす

という複合的な意味を担っているといえるのではないだろうか。

補節 サーミ高校の保護者の生活と意識

第1項 本節の課題と調査の概要

本節では、サーミ高校に通う生徒の保護者を対象とした配布調査の結果を見ていく。

しかし、ここで参照するデータにはいくつかの留意すべき点がある。まず、そもそもノルウェーのサーミ高校調査において、保護者からの回収票は非常に少なかった。保護者調査は2013年12月にカラショークとカウトケイノそれぞれのサーミ高校において、教員を通じて配布を行った。結果として回収できた総数は3票である。その内訳は、カラショークのサーミ高校から、生徒の調査票と同時に送付されてきたものが2票ある。このうち1票は、子ども票との親子ペアであることもわかっている。そしてその他に、高校を経由せずに保護者から直接、国際郵便で届いたものが1票ある。これは先の2票と同じくカラショークのサーミ高校生徒の親から届けられたものと思われるが、カウトケイノの高校に通う生徒の親である可能性もゼロではない。以下ではこの3票を中心に分析していくが、さらに加えて、本章第1節で分析したカラショークのサーミ高校生徒の調査票の中に、何らかの手違いによって保護者が回答しているものが1票含まれていた。生徒と保護者の調査票には重複している質問がいくつかあるので、以下ではこの「手違いの」票も含めて、計4名の保護者のデータを分析対象とする。本節を「補節」としたのは、以上のような理由による。

第2項 保護者の基本的属性

本節で分析する保護者は以下の4名である（表2-補-1、表2-補-2）。便宜的にW、X、Y、Zと名付けよう。このうち母親が3名、父親が1名となり、年齢は不明な1名を除き、39歳、42歳、50歳と幅がある。母親3名はすべてフィンマルク県出身であり、現在もフィンマルクに住んでいる。4名すべてがサーミの血筋であり、父親Zは不明だが母親たちは全員サーミの選挙人名簿に登録している。データ数が少ないので、表2-補-1と表2-補-2を行き来しながら、一人ずつ見ていこう¹⁹⁾。

母親Wは母子世帯であり、母一人、子一人で生活する。現在は「公務員」であるものの、これまでに長く従事していた仕事は「トナカイ飼育」である。最終学歴は「ユニバーシティ・カレッジ」（サーミ・ユニバーシティ・カレッジではない）、現在の年収は「40～50万NOK未満」である。家庭内ではサーミ語を使用しているということであり、実父母、母方祖父母、父方祖父母もすべてサーミ語が話せる。

続いて、母親X、母親Yは家族構成が似ており、夫婦と未婚の子どもからなる核家族世帯で、共に4人家族である。仕事も共に「公務員」であるけれども、Xは「サーミ高校」卒で年収「30～40万NOK」程度、Yは「大学院」卒で個人では「60～70万NOK」、世帯全体では「80万NOK以上」の収入がある。

XとY、それぞれの家庭内のエスニシティには違いがある。Xは配偶者もサーミであり、実父母だけでなく父方、母方祖父母すべてがサーミ語を話すことができる。家庭内での使用言語も、当然「サーミ語」である。他方、母親Yは配偶者が非サーミであり、サーミの血筋で、サーミ語を使えるのは母方祖父母だけのようである。そのためか、家庭内での使用言語は「ノルウェー語」となっ

ている。

唯一の男性、父親 Z に関しては 42 歳で、家庭内での会話はノルウェー語のほうが中心で、少しのサーミ語を使用しているという情報にとどまる。今後も父親の情報は十分ではないけれども、わかる範囲でデータを参照していこう。

以下でははじめに、現在子どもが利用するサーミ高校に対する意識と子ども本人に対する意識を見る（第 3 項）。続いて、保護者自身のサーミの言語や文化との関わり状況を把握する（第 4 項）。さらに、保護者のサーミ・アイデンティティと交友関係について確認し（第 5 項）、最後にノルウェー社会や政治に対しての保護者の意識を見る（第 6 項）。

表 2－補－1 保護者の基本的属性

	学生との続柄	年齢	出身地	現在の住まい	世帯構成	同居人数	仕事	従事の長かった仕事	最終学歴	個人年収	世帯年収
W	母親	不明	フィンマルク県	フィンマルク県	母子世帯	2 人	公務員、トナカイ飼育	トナカイ飼育	ユニバーシティ・カレッジ	40～50 万 NOK 未満	40～50 万 NOK 未満
X	母親	50 歳	フィンマルク県	フィンマルク県	夫婦と未婚の子ども	4 人	公務員	公務員	サーミ高校	30～40 万 NOK 未満	30～40 万 NOK 未満
Y	母親	39 歳	フィンマルク県	フィンマルク県	夫婦と未婚の子ども	4 人	公務員	公務員	大学院	60～70 万 NOK 未満	80 万 NOK 以上
Z	父親	42 歳	----	----	----	----	----	----	----	----	----

表 2－補－2 保護者本人のエスニシティ・家族のエスニシティ

	エスニシティ	サーミ選挙人名簿登録	家族内のサーミ（サーミ語が話せる者には下線）	家族内での使用言語
W	サーミ	○	<u>実父母、母方祖父母、父方祖父母</u>	サーミ語
X	サーミ	○	<u>配偶者、実父母、母方祖父母、父方祖父母</u>	サーミ語
Y	サーミ	○	<u>母方祖父母（※）</u>	ノルウェー語
Z	サーミ	----	----	ノルウェー語と少しのサーミ語

注）※を記した Y の家族内サーミに関して、Y がサーミであることから実父母のうち少なくとも実母はサーミであると考えられるが、回答されていなかった。

第 3 項 サーミ高校および子どもに対する意識

保護者たちのサーミ高校に対する意識から見ていこう。まず、不明の父親 Z を除き、すべての母親が子どもにサーミ高校への進学を勧めている（表 2－補－3）。その理由について見ると、初めに目に付くのは、全員が「家の近くにあるから」を選択していることであろう。W は「自宅から通えるから」という記述も含めこれが唯一の理由といってもよい。「家の近くにあるから」というのは、子ども本人に進学理由を尋ねた際にも最も多かった理由であり（第 1 節表 2－1－6 参照）、親子共々、高校が自宅の近くにあることが進学の大きな決め手となることがわかる。その他、二人ずつ選択されているのは「進学に有利だから」、「資格が得られるから」、「サーミ語の力を高めてほしいから」、一人のみ選択があったのは「就職に有利だから」、「専門的な知識や技術が得られるから」、「家族や親族も通っていたから」、「実践的な教育が充実しているから」、「サーミ文化を学んでほしいから」である。ここに挙げた理由はやはり子ども本人に尋ねても上位を占めていたもので

あることから、親子の意識に大きな違いはないといえる。

表2－補－3 子どもへの進学のお勧めとその理由

		W	X	Y	Z
進学のお勧め		勧めた	勧めた	勧めた	-----
その理由	就職に有利だから		○		
	進学に有利だから		○		○
	専門的な知識や技術が得られるから		○		
	資格が得られるから		○		○
	家業を継ぐため				
	家族や親族も通っていたから			○	
	実践的な教育が充実しているから		○		
	自分がサーミだから				
	サーミ文化を学んでほしいから			○	
	サーミ語の力を高めてほしいから			○	○
	サーミ同士の交流を深めてほしいから				
	家の近くにあるから	○	○	○	○
	子どもの学力に合っているから				
	その他	○			

注) Wの「その他」の内容記述は「自宅から通えるから」。

次に、保護者によるサーミ高校への評価はどうか(表2－補－4)。個人に着目すると、母親たち3名は比較的肯定的な評価が多い一方で、父親Zは否定的な評価(「サーミ語で学ぶので理解しやすい」、「サーミ文化を身につけられる」、「サーミの友人ができる」はすべて「そう思わない」)を付けているところが目立つ。項目ごとにみると、4人中3人が強い肯定を示すのは「サーミ語を身につけられる」である。4人中2人が強い肯定を示しているのは、「専門的な知識が得られる」、「サーミの文化を身につけられる」、「教育設備が整っている」、「進学に有利である」の4項目でありさほど多くはない。ただし、これら4つは子どもへの調査でも7割以上が肯定していた理由であり(第1節表2－1－8)、子どもとの間に大きな違いはないことがわかる。「ノルウェー語が覚えられない」、「ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない」は全員がそうは思わないと否定的だが、これも子どもの傾向と似通っている。子どもの友人関係に関する「サーミの友人ができる」、「サーミ以外の友人との関わりが少なくなる」の2項目はそれぞれ誰一人として同じものを選択していない。子ども調査の結果では、現在の生活の中で大半が「サーミの友人ができる」と実感しており、だからといって「サーミ以外の友人との関わりが少なくなる」というのは決して多くなかった。こうした傾向は保護者へは反映されていないことから、現在の友人関係について、保護者は子どもの実態を等しく捉えきれていないと想像することができる。

表2-補-4 サーミ高校への評価

	W	X	Y	Z
専門的な知識が得られる	4	4	3	3
サーミ語を身につけられる	4	4	3	4
サーミ語で学ぶので理解しやすい	3	2	1	1
サーミ文化を身につけられる	4	4	3	1
サーミの友人ができる	2	4	3	1
サーミ以外の友人との関わりが少なくなる	4	3	2	1
ノルウェー語が覚えられない	1	1	2	1
ノルウェーの習慣や文化に触れる機会がない	1	1	1	1
教育設備が整っている	4	4	3	2
サーミ語の教材が整っている	1	1	3	3
進学に有利である	3	4	2	4
就職に有利である	3	4	2	2
もっと公的財政支援を増やすべき	4	3	3	3
サーミ語の授業を増やすべき	3	3	3	2
サーミ文化の授業を増やすべき	3	4	3	2

注) 4 = そう思う、3 = ややそう思う、2 = あまりそう思わない、1 = そう思わない

子どものサーミ語の学習についても、保護者間で一致しない結果が目立つ(表2-補-5)。まず、「理系科目の学習はサーミ語よりもノルウェー語のほうがよい」に関しては4名すべてが肯定的な評価を示している。これは子どもの結果とも同様であるが、なぜ理系科目はノルウェー語のほうがいいのかという理由まで同じであるとは考えにくい。というのは、高校卒業後のサーミエリア外での進学、就職、生活の際にサーミ語の学習が不利になるかどうかは、4名が見事に違う意見を持っている。不利ではないのではないかと考えるX、Yに対して、Wはある程度不利ではないかと考え、Zは不利になると考えている。高校においてサーミ語中心で学習することが、今後の進学、就職、生活にどう影響するかに関しては、多様な意見を持つ保護者がいるということができるものの、その根拠までは本調査ではわかりかねる。

以上をふまえて、保護者たちのサーミ高校に対する満足度は表2-補-6のようになっている。母親たち3名は一律に子どもにサーミ高校への進学を勧め、高校に対しても比較的肯定的な評価を示していたことから、このように高い満足度を示していることも納得できよう。

表2-補-5 サーミ語の学習について

	W	X	Y	Z
理系科目の学習はサーミ語よりもノルウェー語のほうがよい	3	4	4	3
サーミエリア以外の地域へと進学する際には不利になる	----	1	2	4
サーミエリア以外の地域で就職する際には不利になる	3	1	2	4
サーミエリア以外の地域で生活する際には不利になる	3	1	2	4

注) 4 = そう思う、3 = ややそう思う、2 = あまりそう思わない、1 = そう思わない

表2-補-6 サーミ高校に対する満足度

	全体としての高校への満足度
W	大変満足している
X	大変満足している
Y	やや満足している
Z	----

続いて、保護者が子どもに抱く意識に注目しよう。はじめに、子どもの高卒後の進路について尋ねた結果が表2－補－7である。保護者全員が、卒業後の「進学」を希望している²⁰⁾。就いてほしい職業は様々であるものの、一般的に社会的地位の高い職業——管理職、医師、研究職——が目につく。母親たちは3名とも「公務員」であるにもかかわらず、子どもに同職を望む者はいない。ただし、Wはこれまで最も長く従事していた「トナカイ飼育」を子どもにも望んでいることがわかる。

将来住むところに関しては、母親XとYは「出身地」を希望し、父親Zは「カラシヨーク」である（表2－補－8）。基本的にフィンマルク県内であり、地元志向ではないかと考えられる。生活していくうえでは、「サーミとして積極的に生活してほしい」と考える母親が2名、残りのYは、「とくに民族は意識せずに生活してほしい」とのことである。Yは家庭内でもサーミ語は使用せずノルウェー語で生活しているので、ほかの2名よりサーミ・アイデンティティに意識的ではないといえることができる。

表2－補－7 子どもに対する進路希望と職業希望

	進路希望	就いてほしい仕事（複数回答）
W	進学	会社の管理職／トナカイ飼育
X	進学	医師
Y	進学	会社の管理職
Z	進学	公務員／会社の管理職／会社の技術職／研究職

表2－補－8 子どもの将来に望む居住地と生活についての考え

	居住地	生活についての考え
W	その他（※）	サーミとして積極的に生活してほしい
X	出身地	サーミとして積極的に生活してほしい
Y	出身地	とくに民族は意識せずに生活してほしい
Z	カラシヨーク	----

注）Wが望む居住地に関しては、「その他」が選択されているものの詳細は不明。

第4項 保護者のサーミ語やサーミ文化との関わり

では、保護者自身のサーミの言語や文化との関わりはどうか。表2－補－9は、サーミの言語と文化の習得状況を示したものである。まず、4名とも使えるサーミ語は「北サーミ語」とのことであり、これは子どもの状況とも一致する。サーミ高校の生徒も、70名中66名が北サーミ語を使えると回答していた（第1節表2－1－16）。その言語を学んだ時期に関しては、父親Zは「いつごろかわからない」ものの、母親W、Y、Zは「小学校入学以前」ということである。やはり生徒のほうも、「小学校入学以前」に学んだ割合が過半数を占めていた。サーミ語を教えてくれた人は、4名すべてに共通するのは「祖父母」だが、W、Xはさらに「父母」、「親戚」が加わり、Xのみ「小・中・高の教員」も加えて挙げられている。Xはサーミ文化に関しても家族や親戚、各教員から教わったということだが、彼女はサーミ高校卒であることから、中学から高校にかけて、サーミの言語や文化を学びやすい環境にいたことが想像できる。他方、残りのW、Y、Zからは文化を教わった人が挙げられておらず、YとZは文化を学んだ時期も不明ということである。ここから、言語に関しては学んだ記憶に残りやすいけれども、文化に関しては曖昧なことが多いといえるのかもしれない。

表2-補-9 サーミの言語と文化の習得

	使える サーミ語	サーミ語を 学んだ時期	サーミ語を教えてくれた人	サーミ文化を 学んだ時期	サーミ文化を 教えてくれた人
W	北サーミ語	小学校入学以前 (～6歳くらい)	父母、祖父母、親戚、 きょうだい	小学校入学以前 (～6歳くらい)	----
X	北サーミ語	小学校入学以前 (～6歳くらい)	父母、祖父母、親戚、きょうだい、 小・中・高の教員	中学校のころ (13～15歳くらい)	父母、祖父母、親戚、 きょうだい、小・中・ 高の教員
Y	北サーミ語	小学校入学以前 (～6歳くらい)	祖父母	----	----
Z	北サーミ語	いつ頃か わからない	祖父母	いつ頃か わからない	----

サーミの言語のほうに焦点化すると、その能力に関しては三者三様である（表2-補-10）。言語能力が高いと思われるのは母親 W と X で、話すこと、読むこと、聞くこと、書くことはどれも問題なくできる。それゆえ、サーミ語の学習意志に関して、W は「十分なサーミ語能力があるので習う必要はない」ということだが、X は「習いたい」との意志がある。同じく、サーミ語を「習いたい」Y は、話すことと聞くことに関してはある程度できるものの、読むことと書くことに関してはまったくできないようである。この点は先に見たように、家庭内でノルウェー語を用いていることとも関係しているのだろう。父親 Z は話すこと、読むこと、書くことは「簡単な」ことであれば、聞くことも「日常生活の話題がわかる」とのことで、普段の生活では「ノルウェー語中心で、少しのサーミ語」であったというのもうなずける。

表2-補-10 サーミ語の能力と学習意志

	サーミ語の能力				サーミ語の 学習意志
	話すこと	読むこと	聞くこと	書くこと	
W	流暢に話せる	本が読める	議会のやり取りなどが わかる	どんな文章でも 書ける	十分なサーミ語能力 があるので習う 必要はない
X	流暢に話せる	本が読める *「文字が読める」 も選択	議会のやり取りなどが わかる *「日常生活の話題 がわかる」も選択	どんな文章でも 書ける	習いたい
Y	かなり話せる	何も読めない	日常生活の 話題がわかる	何も書けない	習いたい
Z	簡単な内容なら 話せる	簡単な雑誌が読める	日常生活の 話題がわかる	簡単なメモが書ける	----

続いて、サーミの文化のほうもより詳しく見てみよう。保護者たちは文化を習得した時期や教わった人が曖昧なようだったけれども、わが子へは伝授しているのだろうか。表2-補-11では、サーミ文化の伝授——「サーミ語の言葉で話す」、「サーミの絵本を読む」、「サーミの昔ばなし」、「サーミの手工芸」、「サーミの料理」、「トナカイの扱い方」という6項目について、子どもが高校に入学以前（過去）と、現在の状況を尋ねた。結果、母親 X は過去からずっとすべてのサーミ文化を子どもに示してきていることがわかる。それと対照的なのは家庭内で「ノルウェー語」を使う Y であり、どれも伝授してきてはいない。Y 自身がサーミ文化になじみがないと考えることができる。母親 W は、過去から現在まで、サーミ語で話すこと、サーミの料理、トナカイの扱い方を一貫して伝えており、子どもが高校生になって初めてサーミの手工芸も伝授していることがわかる。

3名の事例にとどまってしまうが、家庭内ではサーミの言語も文化もほとんど触れられない家庭（Y）がある一方で、言語ばかりでなく、サーミの文化も子どもに確かに継承されている家庭（W、X）があることが確認できる。

表2-補-11 子どもへのサーミ文化の伝授（過去と現在）

	過去（子どもが高校に入学する前）						現在					
	サーミ語で話す	絵本を読む	昔ばなし	手工芸	料理	トナカイの扱い方	サーミ語で話す	絵本を読む	昔ばなし	手工芸	料理	トナカイの扱い方
W	○	×	×	×	○	○	○	×	×	○	○	○
X	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
Y	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
Z	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

第5項 サーミ・アイデンティティと交友関係

ここで、親たちのサーミとしての意識に目を向けていきたい。表2-補-12には自分をサーミであると自覚した時期とそのきっかけ、および子育てによるサーミの自覚の変化が整理してある。母親たち3名は、小学校に入学する以前からサーミという自覚があり、父親1名は中学生のころである。自覚のきっかけに関しては、4名中3名が「親以外の家族・親戚から聞いた」を選択している。「親から聞いた」のはXのみ該当していることから、全体として親以外の身内から告知されるケースが多い。しかしXに関しては、親を含む身内ばかりでなく、近所の人や友だち、学校の先生からも指摘されたようであり、これは彼女がサーミ高校卒であることをふまえると、サーミ・アイデンティティを自覚しやすい環境にいたことが再確認できる。さらにXは、子育てによって「サーミであることを誇りに思うことが増えた」と回答している唯一の保護者である。母親W、Yは、子育てによってサーミとしての自覚は「とくに変わらない」。彼女たちは自覚のきっかけも特徴的な出来事があったとはいいがたい。母親たちより自覚が遅くなった父親Zは、そのきっかけとして「身体的特徴に気づいた」を挙げている。これは周りからの影響ではなく、自ら気づいたというニュアンスが強い。思春期を迎える中学生のころになって自覚が芽生えたのではないかと想像できる。

表2-補-12 サーミであることを自覚した時期と子育てによる自覚の変化

	自覚した時期	自覚のきっかけ							子育てによっての変化
		親	親以外	近所の人	友だち	教員	身体的特徴	その他	
W	小学校入学前から（6歳になる前）	×	×	×	×	×	×	○	とくに変わらない
X	小学校入学前から（6歳になる前）	○	○	○	○	○	×	×	サーミであることを誇りに思うことが増えた
Y	小学校入学前から（6歳になる前）	×	○	×	×	×	×	×	とくに変わらない
Z	中学校のころ（13～15歳くらい）	×	○	×	×	×	○	×	----

注）自覚にきっかけについて、左から「親から聞いた」、「親以外の家族・親戚から聞いた」、「近所の人から聞いた」、「友だちから指摘された」、「学校の先生に指摘された」、「身体的特徴に気づいた」、「その他」である。

では次に、保護者たちの交友関係や差別経験に目を向けてみよう（表2－補－13）。子どものころのサーミ以外の人との関わりについて尋ねたところ、母親たちは三者三様の結果である。Wは非サーミの人と「関わりがなかった」、Xは「いじめられた」という。Wは子どものころに非サーミとは疎遠であり、Xは良くない関係であったといえる。この2名は、「サーミであることを理由として差別された経験あるいは差別を実際に見聞きしたことがあるか」との問いに、共に「ある」と答えている。その差別が自身に向けられたものかどうかまでは不明だが、子どものころからエスニシティを意識せず、非サーミとも付き合ってきたわけではない。反対に、Yは子どものころから非サーミと「仲良くつきあっていた」といい、差別経験も「ない」。こうした3名の違いは、現在の人間関係にも反映されている。差別経験があり、過去に非サーミと親しくはなかったW、Xは、現在「サーミの人々とのつきあが多い」。一方、子どものころから非サーミとも良好な関係を築いてきたYは、現在「サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている」という。ここに見られる結果は、家族構成とも関係があるのかもしれない。Yの家庭のみ、配偶者が非サーミであった上に、これまでの検討においても、他の2つの家庭と比べて、サーミの言語や文化になじみが薄いことがわかっている。

表2－補－13 過去と現在の交友関係、差別経験

	子どものころ（サーミ以外）	差別経験	現在
W	関わりがなかった	ある	サーミの人々とのつきあが多い
X	いじめられた	ある	サーミの人々とのつきあが多い
Y	仲良くつきあっていた	ない	サーミの人々、サーミ以外の人々とも同じくらいつきあっている
Z	----	----	----

ところが、こうした違いが今後のサーミとしての生き方の考えにも反映されているかというところ、そうともいえず、明確なデータは得られなかった（表2－補－14）。今後、どのように生活していきたいかを尋ねたところ、母親XとY、2名の「無回答」が目立つ。Wのみ、これまでの回答と矛盾せず、「サーミとして積極的に生活したい」と回答している。選択肢としては、「サーミとして積極的に生活したい」、「とくに民族は意識せず生活したい」、「サーミであることを知られないように生活したい」、「その他」の4つを用意していた。2名とも、これまでの回答には目立って無回答がなかったことをふまえると、今後の生活に対する考えにのみ「無回答」という結果は、決めがたい思いがあるのではないかと想像できる。ちなみに、父親Zは「サーミとして積極的に生活したい」と考えており、さらに自由記述にて「サーミのアイデンティティを強調したい」とも述べている。

表2－補－14 今後の生活に対する考え

W	サーミとして積極的に生活したい
X	無回答
Y	無回答
Z	サーミとして積極的に生活したい、サーミのアイデンティティを強調したい

第6項 政治や社会についての意識

分析の最後に、保護者たちのノルウェー社会に対する意識を確認する。まず、ノルウェーの中に

ある様々な不公平について、4点尺度で尋ねた結果が表2-補-15である。個人によって様子が異なっており、まず、Yはすべての項目について「あまりない」とする。繰り返しになるが、Yは普段の生活もサーミとしての要素が強くないため、様々な不公平感を抱きにくいといえるのかもしれない。また、Yは大学院卒で公務員であり、年収が高いこともこの点に関係していよう。XもYとさほど変わらない考えを示している。「職業による不公平」、「所得・資産による不公平」は「ない」と強い否定を選んでもいる。ただし、「学歴による不公平」のみ「少しある」を選んでいることから、日本以上に高い大学進学率となっているノルウェー社会の中で、サーミ高校卒であることによる不公平を感じたことがあるのかもしれない。最後に、Wはどの項目も不公平があると回答している。とくに、「家柄による不公平」、「人種・民族による不公平」は「よくある」という。サーミであることによる差別経験を持っていたことが、こうした人種・民族による不公平を訴えることにつながっていると考えられる。家柄による不公平については、母子世帯であることや、長い間トナカイ飼育に従事していたが現在はしていないことなどが何らかの因果を持っているのかもしれないけれども、これ以上に追求していくのは限界がある。

表2-補-15 ノルウェー社会にある不公平についての考え

	W	X	Y	Z
性別による不公平	3	2	2	----
学歴による不公平	3	3	2	----
職業による不公平	3	1	2	----
所得・資産による不公平	3	1	2	----
家柄による不公平	4	2	2	----
人種・民族による不公平	4	2	2	----

注) 4 = よくある、3 = 少しある、2 = あまりない、1 = ない

ノルウェー政府のサーミ政策に対する考えについても、4点尺度で尋ねた(表2-補-16)。比較的、社会における不公平があるという意識を持っていたWは、「サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき」をはじめ、すべての項目に強い肯定を示す²¹⁾。同じく、Xも基本的にはサーミ政策全般に対して要求が強く、「サーミを対象とする特別の施策は行うべきではない」という考えには強い否定を示しているため、サーミを特別視した施策を必要だと感じている。しかし、これまでサーミとしての要素が強くないことがわかってきたYは、政策についても冷静である。とりわけ、「サーミへの教育支援を拡充すべき」、「サーミに対する経済的援助を拡充すべき」、「サーミの土地・資源に対する補償をすべき」には「まったく重要ではない」とする。つまり、見方を変えればサーミだけが社会の中で優遇されるとも受け取れるこれらの政策について、否定的であるということである。「サーミを対象とする特別の施策は行うべきではない」に強い肯定を示しているのもその証拠であろう。同時に、「サーミに関する正しい理解を促進すべき」というのもとても重要としていることから、現状のサーミのあり方や周囲の理解には納得していないと考えられる。サーミの血筋でありながら、非サーミとも交流のある生活を送っているからこそこういった意識を持ちやすいのではないか。

表2-補-16 ノルウェー政府のサーミ政策に対する考え

	W	X	Y	Z
サーミへの差別が起こらない社会をつくるべき	4	4	3	----
サーミ語・サーミ文化を守るべき	4	4	3	----
サーミに対して雇用対策を拡充すべき	4	3	2	----
サーミへの教育支援を拡充すべき	4	4	1	----
サーミに対する経済的援助を拡充すべき	4	4	1	----
サーミの土地・資源に対する補償をすべき	4	4	1	----
サーミに関する正しい理解を促進すべき	4	4	4	----
サーミ議会の権限を拡大すべき	4	3	1	----
国会のフィンマルク議席数を増やすべき	4	4	3	----
国家予算のうちサーミ関連予算を増やすべき	4	4	2	----
サーミを対象とする特別な施策は行うべきではない	4	1	4	----

注) 4 = とても重要、3 = ある程度重要、2 = あまり重要ではない、1 = まったく重要ではない

第7項 小括

以上、サーミ高校に通う生徒の保護者たちの生活と意識について、4つの事例を検討してきた。

はじめに、保護者のサーミ高校や子どもへの意識を振り返ってみよう。保護者たちは概してサーミ高校に対しては満足度が高く、自宅から通いやすいことを筆頭に、資格取得ができること、就職に有利なことなどを理由に進学を勧めてきた。ただ、子どもの学校生活や友人関係までは共通に理解しているとはいいがたく、それぞれの考えを持っていた。高卒後の進路に関しては、親たちは一様に進学を願っており、将来は地元に住んでほしいと考える親も多かった。その際、医師や管理職など、社会的地位の高い職に就いてほしいと考える傾向にある。以上のような子どもへの思いや子どもの学校への意識は、高校生の親としてごく一般的なものではないかといえる。

しかし、親たちのサーミとしての生活や意識に注目すると、いくつかのパターンが明らかになった。以下では母親3名それぞれについて振り返ってみよう。

1人目に、過去に「トナカイ飼育」に従事したことのある母親 W である。彼女は十分なサーミ語の力があり、本人もサーミとして積極的に生きて行くことを望み、子どもにもそうあってほしいと願っている。母一人、子一人の母子世帯だが、言語だけでなくサーミの料理、トナカイの扱い方を小さなころから子どもに伝え、現在はサーミの手工芸も教えている。3名の中では最もサーミ・アイデンティティを肯定的に捉えているタイプといえる。家柄や人種・民族による不公平がノルウェー社会にあるとも考えており、サーミ政策の充実を強く望んでいる。

2人目に、W ほどではないが家庭ではサーミとしての文化が色濃く、サーミ語を主としている X である。彼女はサーミ高校出身であり、結婚前からサーミ文化になじみのある生活が長かったのではないかと考えられる。家庭内では過去から一貫して、親から子へとサーミ文化の継承がなされている。彼女の特徴は、過去に非サーミからのいじめの経験があることであろう。それゆえ、現在でもサーミの人々とのつきあいを中心としている。サーミを対象とする特別な施策はあってもよいと考えており、サーミへの差別が起こらない社会を作ることがとても重要だと考えている。このようにみると、先の W と似通ったケースだが、彼女の場合は今後の生き方について明らかにしていない。

3人目に、配偶者が非サーミで、家ではノルウェー語が中心の Y である。サーミ語の読み書き

はできないため、サーミ語を習いたいと考えている。彼女自身、サーミ文化は継承されてこなかったようで、わが子にも示すこともしていない。また、子育てを通じてサーミとしての自覚に変化もなかった。子どものころから非サーミとは親しくしており、現在もサーミとそれ以外、同じくらいの交流がある。彼女は、ノルウェー社会にはあまり不公平がないと感じている。むしろ、サーミを特別視すべきではないと考えており、サーミに対する教育や経済的援助には難色を示す。彼女の場合、3名の中ではかなり客観的にサーミを捉えているといえよう。

3名のサーミ・アイデンティティや現在の社会に対する考え方の違いは、家族の血筋の多さ、過去の差別経験、現在の職業、学歴との関係を見ると納得のいく部分が多くあった。今回は男性の分析ができていないに等しいため、父親とも比較をしてさらに保護者の実態を明らかにする必要がある。事例がきわめて限定的であったけれども、サーミ高校を利用する保護者たちの微妙な意識の差や、ある程度の生活様式は浮き彫りにすることができたのではないだろうか。

注

- 1) ノルウェーの学校制度は、小・中学校の義務教育が10年間、高校が3年間、大学が最少年限で3年間の、7・3・3・3制である（品川 2013:53）。小学校の就学年齢は日本より1年早く満6歳になった翌年なので、ストレートに進学した場合、高校入学は日本と同様の満15歳の翌年となる。
- 2) 残りの19歳以上の2名は学年が不明である。
- 3) 本章第2節の小野寺の分析より。表2-2-6によると、J教諭が理系科目を担当している。
- 4) 以下、本章では、2×2のクロス表の場合はフィッシャーの正確確率検定を、それ以上のクロス表の場合はカイ二乗検定を用いる。
- 5) GLOBAL NOTE (<http://www.globalnote.jp/post-10165.html>) を参照。
- 6) サーミ・ユニバーシティ・カレッジに関しては品川（2013）の第5節に詳しい。社会学部の教授の聞き取りによると、「賢い、できのいいサーミの学生はこの大学には入学してこない」ということである。本節において「サーミ・ユニバーシティ・カレッジ」への進学希望者がまったくおらず、他の地域の大学名が挙がっている状況は、品川（2013）で明らかになった聞き取りの結果を裏付けるものといえる。また、今回のカラショークのサーミ高校訪問時に行うことができた2つのクラスの生徒に対する簡単な集団的質問の際にも、「サーミ・ユニバーシティ・カレッジ」への進学希望者がいなかった。
- 7) 単一の回答を求めた設問であったが、複数の選択肢に回答した者がいた。そこで以下の手続きで再コード化した。すなわち、①「サーミ語とノルウェー語を半々」が回答に含まれていれば「サーミ語とノルウェー語を半々」に再コード化し、②①に当てはまる者以外で、「サーミ語」か「ノルウェー語」が回答に含まれていればそのどちらかに再コード化した。
- 8) 見やすさを考慮し、使用言語は「サーミ語」（「サーミ語」「サーミ語と少しのノルウェー語」）、「半々」（「サーミ語とノルウェー語を半々」、「ノルウェー語」（「ノルウェー語と少しのサーミ語」「ノルウェー語」）の3カテゴリに再整理してある。
- 9) 具体的には以下のように再カテゴリ化した。
・「小学校入学前」のみ回答 → 「小学校入学前」

- ・「小学校入学前」に回答+それ以外も回答 → 「小学校入学前 小学校の頃 中学校の頃」
 - ・「小学校の頃」のみ、「中学校の頃」のみ、「小学校の頃」かつ「中学校の頃」 → 「小学校の頃 and/or 中学校の頃」
 - ・「いつ頃かわからない」 → 「いつ頃かわからない」
 - ・「高校入学前にサーミ語は学んでいない」 → 「高校入学前にサーミ語は学んでいない」
- 10) それぞれカテゴリを縮約した。言語能力は4カテゴリから3カテゴリに（例：「話すこと」の場合、「簡単な内容なら話せる」と「ほとんど話せない」を同一カテゴリに）、アイデンティティは4カテゴリから、「つねに意識している」と「それ以外」の2カテゴリに整理した。
 - 11) サーミ語の学習経験とサーミ文化の学習経験に関しては、「サーミとして意識することがあるか」とカテゴリをあわせるために、回答した選択肢の中で、一番時期が早いものにカテゴリを再度割り当てた。
 - 12) 「サーミ語を身につけられる」は、「そう思う」「そう思わない」の2カテゴリに整理した。
 - 13) 高校への評価は「そう思う」「そう思わない」の2カテゴリに整理した。
 - 14) トナカイ業については、「トナカイ飼育」「トナカイ角の加工」「トナカイ食肉加工」の3つのいずれかを回答している者とそれ以外という形で、新たに変数を作成した。
 - 15) 今後どのように生きていきたいかについては、「サーミとして積極的に生活したい」とそれ以外の2値に再カテゴリ化した。
 - 16) なお、性別と学科のクロス表を確認すると、進学コースに在籍している者は、女性で82.4%、男性で68.6%とやや女性が高くなっているものの $p=0.264$ と有意ではない。
 - 17) ユニバーシティ・カレッジは、いわば「地域の高等教育機関」であり、ユニバーシティに比べるとアカデミック・レベルは低い。品川（2013）を参照。
 - 18) その他にも、そもそも、カラショークと「サーミ・ユニバーシティ・カレッジ」があるカウトケイノは120kmほど離れておりそうした地域的な要因が影響を与えている可能性があるなどの可能性も考えられる。
 - 19) なお、Wが国際郵便によって個別に回収されたケースである。X、Yがカラショークのサーミ高校に通う生徒の保護者であり、Xは子ども票とペアになる。Zは生徒の調査票に回答したケースのため、分析結果はわかる範囲で掲載している。不明な部分は表中に「-」で示した。
 - 20) このうち父親Zは、子どもに「トロムソ大学」への進学を望んでいる。子どものほうの調査票に回答したことでわかったことである。
 - 21) 彼女の考えに沿うと、最後の項目、「サーミを対象とする特別な施策は行うべきではない」にも4（とても重要）が付いているのは矛盾するが、誤回答の可能性もあるのでこの点は分析しない。

参考文献

- 新藤慶, 2013, 「サーミ学校教員の教育実践と意識」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29 ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、109-118.
- 品川ひろみ, 2013, 「サーミの教育の歴史と現状」 小内透編著『調査と社会理論・研究報告書 29 ノルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、109-118.

ルウェーとスウェーデンのサーミの現状』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、
53 - 65.

(はじめに・第1節第2・3・4項・おわりに：上山浩次郎、第1節第1項・補節：佐々木千夏、
第2節：小野寺理佳)